

76  
72

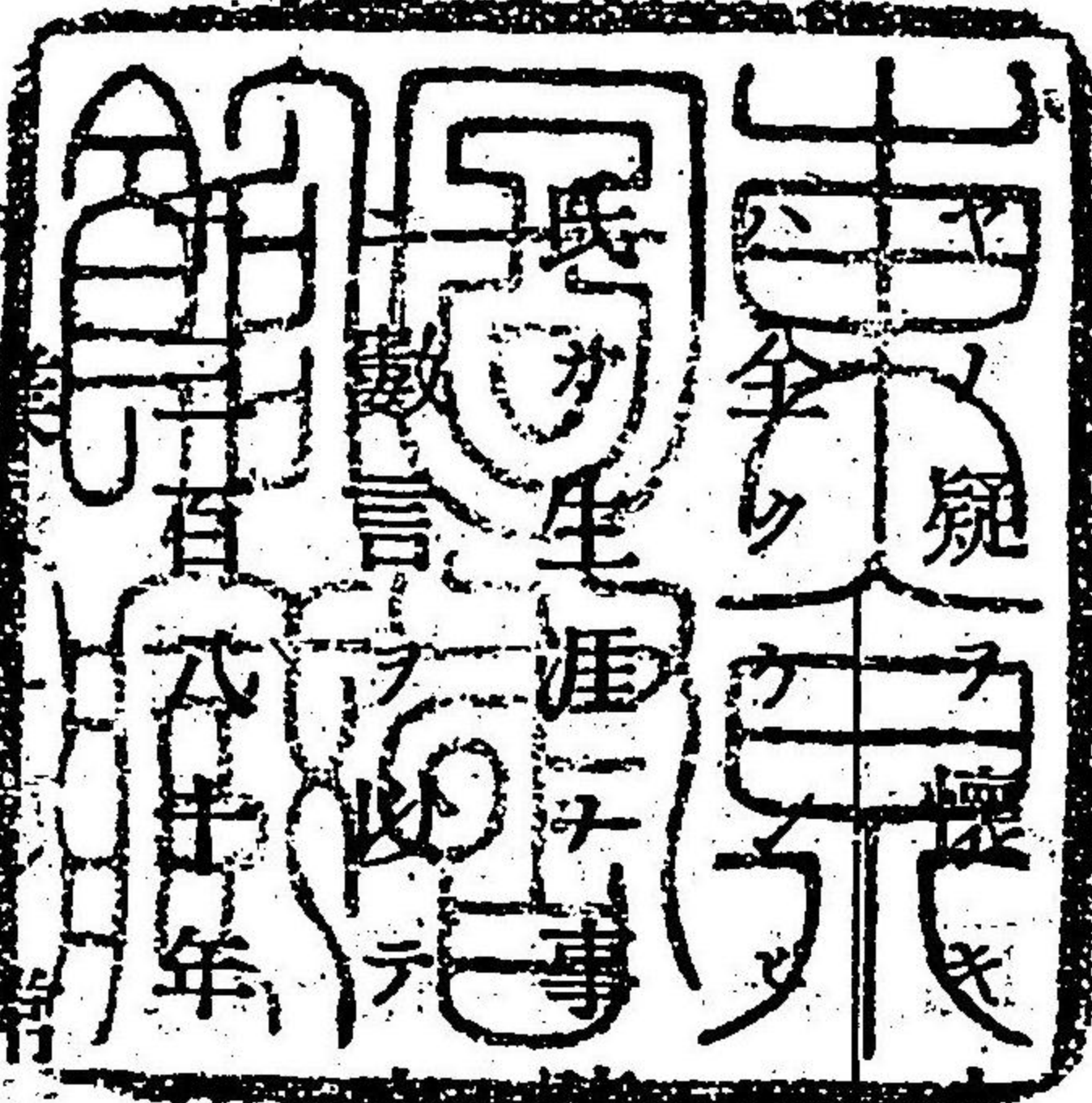
十  
五

竹  
軌

特18  
425

序

今茲ニ日本ノ衣裳ヲ粧ヒタル此小冊子ハ十五世紀ノ始メ同栖兄弟會ノ隱士トシテス氏ナリ本書ハ近頃マデ何人ノ手ニ成リシ



之ヲ批難スルモノモ多カリシガ今ハ氏ノ著述タルコト明瞭セリ其

之ヲ明ニ記スルコトヲ得ベシ氏ハ一和蘭ケムペン市ニ生ル父ハ金銀工

ヲ以テ氏ニ視セリ母ハ他ノ諸聖賢ノ母ノ如ク秀



群ノ敬虔者ニシテ大ニカヲ氏カ幼時ノ教育ニ致セリ氏ノ始メ文學ヲ修メタルハ氏ノ後年屬隸シタル同栖兄弟會ノ校舍ニシテ其學ビタル學科及ビ授業法ノ精良ナルハ當時尋常學校ノ外ニ出テタリト云フ抑モ此會ノ規律ハ之ヲ他隱士ノ遵守スベキモノニ比スレバ稍々寛裕ナリト雖モ其定意ハ專ラ克己ヲ重ンジ惟一ニ靈ノ上達ヲ以テシ又大ニ青年ノ教育ト其地方庶人ノ靈命ヲ進ムルトニ盡力セリ氏ハ一千四百六十六年此會ノ會員トナリ一千四百十四年會長ノ聖職ヲ受ク其後教會ニ關スル難事起リ會員姑ラク四方ニ離散スルキノ

外氏ハ其故園ニ遠カラザルツラレト邑ノ近傍ナル聖アグ子ス院ニ在リ怡然トシテ其壽ヲ保テリ氏ノ其職ニ在ルヤ常ニ説教ヲ怠ラズ會員ノ干與ル善業ニ從事シ又會ノ各要務ヲ帶フルト雖モ專ラカヲ文學ニ致セリ氏ハ浩翰ナル「ラテン」語ノ聖書ヲ全ク抄寫シテ更ニ之ヲ四大卷ニ分テリ此業實ニ十五年ノ長キ星霜ヲ歷タリト云フ此他氏ハ會員ノ義務ト靈ノ生活ヲ修養スルトニ關シ小冊子ノ聯篇ヲ編纂セシモノ尠カラズ氏ハ終始此ニ從事シ遂ニ九十一ノ高齡ヲ以テ聖雅各ノ祝日ニ永眠セリ舊記ニ云日終祈禱ノ后ナリト

氏ノ著書中基督ニ倣フ事(世範)ト題スルモノハ氏  
 ガ在世々紀終ラザルノ前既ニ著名ノ書トナリタ  
 リ爾來數多ノ方言ニ譯セラレ又幾多熱心信徒ノ  
 多クノ事實相異ル所アルニモ拘ラズ皆愛讀賞賛  
 シテ之ヲ伴侶トナセリ而シテ人普ク之ヲ證シテ  
 曰ク若シ夫レ讀者神ノ恩佑ヲ受ケテ之ニ熱習セ  
 バ己ヲシテ深ク神ニ親和セシムルニ至ルヤ必然  
 ナリト宜ナル哉基督教ヲ奉ゼザルノ人ト雖モ本  
 書ノ美妙ナルハ之ヲ證シテ吝マザルコトヤ  
 抑モ本書ノ和譯ハ今日ヲ以テ始トナスニアラズ  
 今ヲ距ルコト三百年前本邦在留ノ宣教師既ニ之

ヲ翻譯セシモ惜哉羅馬字ヲ以テ印行セルニヨリ  
 廣ク世間ニ傳播セザルモノト見ユ今ヤ再ビ之ヲ  
 譯シテ世ニ公ニス是レ猶本書ノ西洋諸國ニ於ケ  
 ルガ如ク東洋ノ本土ニ在テモ亦同シク神ノ爲ニ  
 盡ス所アルヲ冀フニ因テナリ讀者若シ本書ヲ以  
 テ唯敬虔的書冊ノ妙作トナシ又以テ信徒ノ靈魂  
 ヲ進ムルガ爲メ基督教勢力ノ顯著ナル證トナス  
 ニ止マラズシテ本書載スル所ノ勸言教規ノ補助  
 ヲ得基督ガ其言行ヲ以テ弟子ノ爲ニ制定セラレ  
 タル完全ノ標準ニ益親和スルヲ努ムルアラバ則  
 チ本書ハ此國ニ於テ又大ニ神ノ爲ニ善キ働キヲ

爲スノ冊子下ナルベキナリ請フ本書ヲ讀マント  
 スルヲ諸氏ハ先ツ祈禱ヲナシ以テ徐カニ之ヲ繙  
 ケ今ヤ眸ヲ洋ヲ東西ニ放チテ人々ノ生路ヲ視ル  
 ニ迅速是レ貴ヒ憤怨是レ行フ此時ニ當リ之ガ弊  
 風ヲ一掃スルハ其レ遼遠ナル修道院ノ幽窟ヨリ  
 出テ然ル言語ヲ研究スルニアル歟  
 茲ニ附記スベキモノニアリ  
 (二)諸氏ハ本書ヲ通讀スルニ方リ十五世紀中當時  
 ノ事情並其諸說ニ誤謬アルトヲ見シ然レドモ譯  
 者ハ漫然ニ其枝葉ヲ芟ラズ悉ク之ヲ存置セリ蓋  
 シ好古ノ士ハ之ヲ削除スルヲ欲セズ又教理ニ通

曉スルノ信徒ハ爲ニ迷津ノ恐レアラザレバナリ  
 (三)本書ノ要ハ各自一個ノ内心内生ノ進歩ヲ計リ  
 其眞理ヲ解説指命スルニアルナリ顧フニ此事ニ  
 係ル信徒ノ著作中此書ノ右ニ出ルモノ蓋シ之レ  
 アラザルベシ然レドモ家族朋友教會及ビ國家ニ  
 對スル義務如何ヲ説クモノ極メテ僅少ナリ是皆  
 本書ノ範圍外ニアルヲ以テナリ讀者須ラク記ス  
 ベシ此書ハ新約聖書ノ如ク意義廣濶ナラズ又神  
 學若クハ道德ヲ教ユル完全ナル書冊ニアラザル  
 願フハ神恩惠ヲ垂レ譯者多少ノ勞苦ヲ積ミタル

本書ニ據リ幾多ノ日本信徒ヲシテ克ク基督ニ摸倣シ基督ノ心ヲ以テ其心トナサシメ給ハンコトヲ

一千八百九十一年第二月二日

在日本東京

監督 エドワード・ピカステス識

例言

本書ハトマス、ア、ケンピス氏所著の基督に倣ふ事と題する小冊子の羅旬語を以て書したるものと一千八百八十八年英國にて反譯せしものを基礎とし且前年日本に在留せし英國人ライト氏の久々苦辛して草せし和譯の稿本を參酌して譯述せしものなり  
本書の譯述結了の上はケンピス氏の略傳並に此書の傳來等に付き更に序述する處あらんとせしが監督ピカステス氏は此反譯の美舉あるを賛し右に載せたる頗る此書に有益なる序文を草して寄せられたり氏の序文の即ち譯者が已に期したるケンピス氏の事歴並に此書の由來等簡にして能く其事實を擧げられたるを以て譯者は

其惠によりて更ふ之を序述するの勞を省きたり然れども本書譯述の次序並ふ文中一二の事項は讀者に必用なるが故に聊か茲に辨せんとす

此書は意旨深重にして多くの甘味を含有するが故に之を譯述するに際し若し其語言を誤り從て本旨を轉換することあれば大に原著者の深意を傷け且世に益なからんことを恐れ其譯文の結構並に句中の熟字等頗る謹みを加へ可成的原文に適切なるものを撰用し漫りや文飾して冗辭を加へざるが故に行文或は流暢ならざる所なきにあらざれども讀者宜しく譯者の用意を諒し徒らに行文の拙劣を以て之が批評を下すこと勿れ

此原書は第一より第四卷に至りて完く一部の冊子となりたるものあり然れども其記述の顛末を聞すれば其第二第三の兩卷の靈魂の生命を保持する上は付き僅かの區別あるまでにて粗第一卷と同じきものなれども第四卷に至りて完く之と異りて専ら主基督の設け給ひし聖餐を守るに緊要なる事項を掲げたるものなり今吾人の取て以て最も有益なるは第一第四の兩卷に在りとす故に譯者は殊更に其順序を轉じて譯出し以て之を一部の書冊に構成せり其第二第三兩卷の譯述は姑く之を他日の業に付す

文中修道院と書するものは本書の原文著述の當時に現存せし精舎の名にして恰も日本の寺院の如きものあり又文中に修道者と書するものは塵俗を離れて此院中

懈怠し専ら其道を修業するものにして所謂僧侶と相同じきものなり

各章中の諸節並に引照の標記の一は原著者の定むる所より従ひ更は修正せしものなし又引照の下方は(羅)とせしものは其引照の羅句語たるを示したるものあり此原文の著述は其年代最も古きが故に今日とは完く其事情の同じからざるものあり又其主意は於ても譯者は完く之に信服せしよあらざれども此書の廣く世に行はるゝを見れば固より世教は益あるや疑ひを容れざる所なり讀者宜しく此書の妙趣を看破して其益を領すべし

本書の譯述己に脱稿するの際同原書の第一第二の兩卷を譯して基督の模範と題する譯書の出るに會ひたり然

れども本書は前に述べたる如く其譯出の順序も同じからず従て其体裁も亦異なる所あるものと信じ茲は之を發刊することゝあしたり抑も此書の世に出てゝ能く行はるゝと否と一に讀者諸氏の取捨に任ずるのみ

明治廿五年七月

譯者識



世範卷之一

目次

靈魂の生命を保持するの要訓

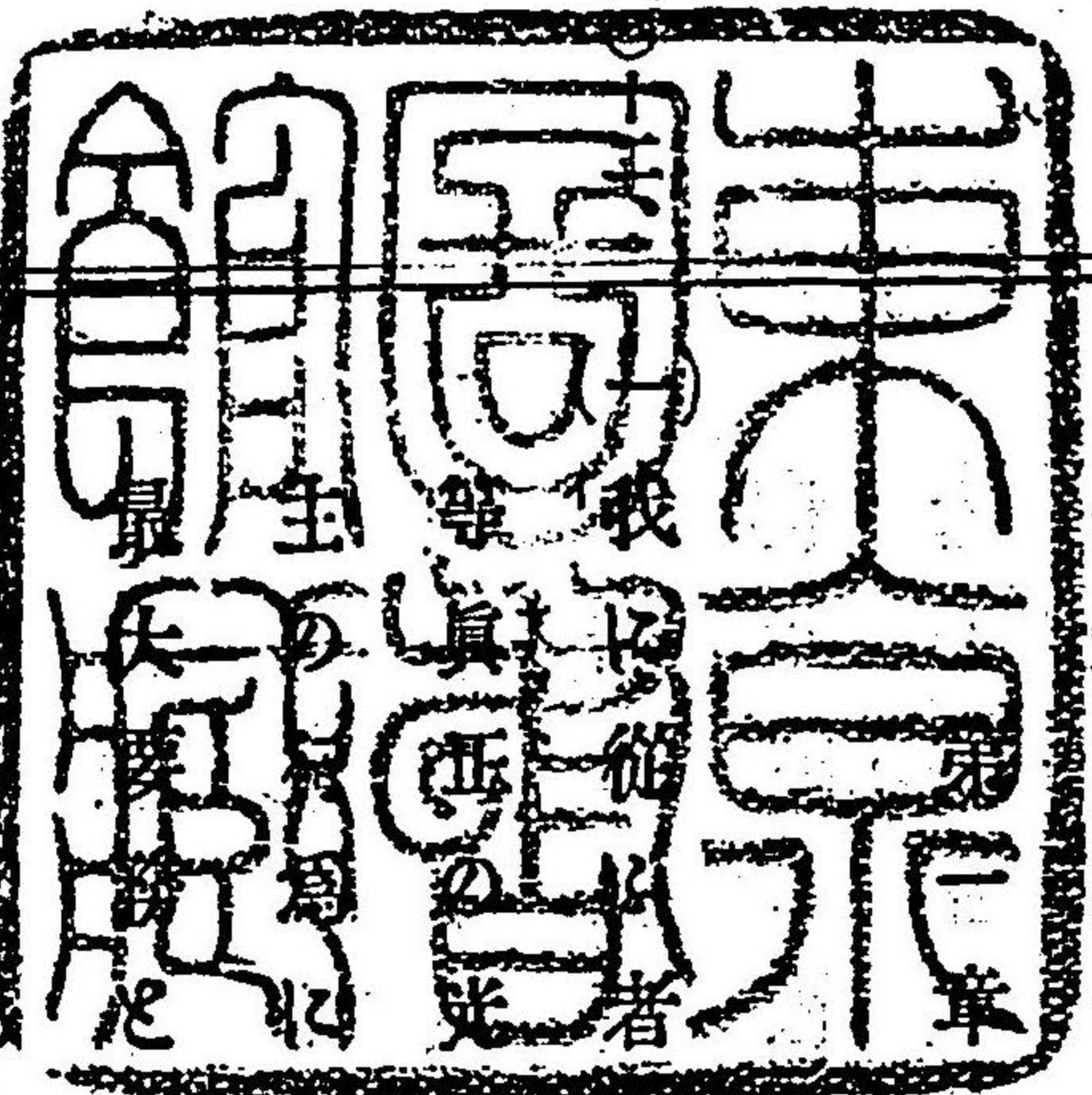
- 第一章 基督に倣ひて世の虚榮を輕んずべき事 (一)
- 第二章 自己を知りて謙遜すべき事 (四)
- 第三章 眞理によりて教訓らるべき事 (七)
- 第四章 行爲を戒慎すべき事 (十三)
- 第五章 聖書を研究する事 (十四)
- 第六章 過度の慾情 (十六)
- 第七章 空望と驕傲を避くべき事 (十七)
- 第八章 過度の交親を慎むべき事 (二十)
- 第九章 從順並よ人の支配を受くる事 (二十一)

- 第十章 多言を慎むべき事 (二十三)
- 第十一章 平安を求め並に靈魂の上達を熱望する事 (二十五)
- 第十二章 苦難の益 (二十九)
- 第十三章 誘惑に敵すべき事 (三十)
- 第十四章 暴議を避くべき事 (三十七)
- 第十五章 愛よりて行ひたる所爲シワザの事 (三十八)
- 第十六章 他人の欠点を堪へ忍ぶ事 (四十一)
- 第十七章 修道院者の事 (四十三)
- 第十八章 聖列父の龜鑑 (四十五)
- 第十九章 善良なる修道者の修行 (四十九)
- 第二十章 獨居靜黙を愛する事 (五十五)
- 第二十一章 心の痛悔 (六十二)

- 第二十二章 人類の艱難を思察する事 (六十六)
- 第二十三章 死を考想する事 (七十二)
- 第二十四章 審判と罪人の刑苦 (七十九)
- 第二十五章 熱心を以て一生の言行を改換する事 (八十五)

世範卷之二

靈魂の生命を保持するの要訓



イ約八

口黙二〇十七

第一章 基督に倣ひて世の虚榮を輕んずべき事

我に倣ひ者は暗中ソラキを行すと是れ基督の聖言にして我等眞正の光により心の迷味ソラキを脱せんと欲せば必らず主の爲に法るべきを訓誨せるものなり故に我等の最大義務は是れを望するにあり

基督の聖訓ハ諸聖人の教訓より優れり而して基督の靈を有する者は其聖訓中より包藏せるマナを得べし然れ

とも多くの人は屢其福音を聞くも更に神を敬慕する  
 の心を起すことなし蓋し其心に基督の靈を有せざる  
 が故なり實に基督の言行を充分に曉悟らんと欲する  
 者は須らく先自らの言行をして基督の言行に適合せ  
 しめんことを努めざるべからず  
 (二) 假令克く三位一體の説を了解し喋々之を辨明し得る  
 も若し謙遜の徳を缺き従て三位一体なる神の聖旨も  
 稱はざれば何の益する所あらんや抑高尚の言論は人  
 をして聖且義ならしむること能はず只徳行は能く神  
 の愛を傾けしむるに至るや明なり故に空しく痛悔の  
 意義に通達せんより寧ろ心は痛悔の念を感發するの  
 勝れるよ若かず假令また聖書の全般に熟達し能く諸

大四〇十、  
 二傳一〇二、

哲學者の言を知悉するも若し神の愛なく恩寵なから  
 んには果して亦何の益かあらん  
 世間惟神を愛し之に事へ盡すの外は皆空の空にして  
 都て空事あり然らば人は世の虚榮を意に介せず惟天  
 國に向て其歩を進めんことは最も高尚なる智慧と謂  
 ふべし  
 朽果つべき財貨を慕ひ之に依頼むは則ち空事あり名  
 譽を欲し高位を望むも亦空事あり肉慾を縱よし後遂  
 よ恐るべき重罰を受くるの種とあるものを追ひ求む  
 るは亦空事なり徒らよ長壽を望み意を徳行に注がざ  
 るも亦空事なり當に目前のことのみ念ひ毫も將來を  
 慮らざるも亦空事なり瞬時にして過ぎ去るものに懸

懣して歡樂限りなき所は向て馳せざるも亦空事なり  
箴言あり曰く目は見るに飽くことなく耳は聞くに充  
ることなしと我等常に之を記憶し努めて見ゆるもの  
を愛するの念を斷ち思ひを轉じて見ゆる所のもの  
を欣慕すべし蓋し私慾に耽るものは其良心を汚濁し  
神の恩寵を失なへばなり

第二章 自己を知りて謙遜すべき事

(一) 多識を欲するは人の天性なり然れども惟多識なるの  
みにして神を敬慕するの心なければ果して何の益あ  
らんや己が修養を怠り却て遠大なる天文學は通達せ  
んとを努むる高慢なる學者は却て神は事ふる謙遜な  
る無識の農夫に劣れり故に能く己を知るものは益其

思念を卑下し敢て他人の稱賛を容るることなし假令  
我世事の全般に通曉するも若し愛なくんば吾が行爲  
の善惡によりて審判し給ふ神の前に於ては將た又  
何の益あらんや  
濫り多識を求むること勿れ蓋し多識は心を錯亂詐  
偽に陥らしむること多し世の學識ある者人より智者と  
せられ識者と稱せらるるを以て無上の快樂となせり  
然れども世間多くの學術の中には靈魂を補益せざる  
が如きもの太だ多し然れば其極救を得るものを怠り  
却て無益の他事に汲たるは愚の至りと謂ふべし夫  
れ多くの言語は靈魂を満足せまむること能はず惟善  
良の行爲は其心を慰藉し己を責めざるの良心は神の

前に於て更に畏憚する所なし  
 智惠益進み識力彌富むに隨ひ其言行も亦之に伴ふて  
 清潔に進まざれば其審判を受くるや更に嚴なるべし  
 然らば汝の技藝學問を以て心は驕矜することなく却  
 て汝は與へられたる智識により其責の重きを恐るべ  
 し

(二) 汝許多の事を悟り得たりと思はれ尙未だ知らざるこ  
 どの許多なるを知るべし汝自らを博識とする勿れ却  
 て自らを無識と認めよ學識汝より博く聖經汝より熟  
 達せる者極めて多し何ぞ人よ先せんとするや汝若し  
 有益なる智識を得んと欲せば須らく人よ知られず人  
 に貴まれざることを望むべし

最も高尚よまて最も裨益ある學問は深く自ら省み克  
 く己を知るにあり常よ人を高貴とし自らを卑拙と思  
 ふは是れ至智至誠の徳なり假令人の明らかなる罪又  
 は至惡なる過失を見ることあるも之を以て己は劣れ  
 りとする勿れ蓋し汝も永く其善狀を保つや否知らざ  
 ればなり凡て人は懦弱なるものなり就中汝は殊に懦  
 弱なるものと思ふべし

第三章 眞理によりて教訓らるゝ事

(一) 虚聲外像に依らず直接に眞理によりて教訓られ眞理  
 の實況を知る者は幸福あり夫れ我等の考説我等の知  
 覺の屢自らを欺くことありて見極むる所至て少し  
 凡て深遠にして測るべからざること付喋り辨難す

イ那五〇廿一

るは何の益あらんや假令之を知らざるも審判の日之  
 が爲に譴責を蒙ることなかるべし故に有益にして欠  
 ぐべからざるものを怠り有害にして奇なる物に心を  
 傾くるは愚の至りと謂ふべし是れ則ち目あれども見  
 ること能はざるものゝあらずや物の種を分ち類を定  
 むるは我等何の關係あらんや  
 永遠の道の語るを聞くものは許多の世説妄想に苦し  
 むを免るべし抑萬物の生ずるは道より萬物の語る  
 所は道なり道は元始にまて亦我等に語れり故に此道  
 を容れざる者は正鵠の理解判定を爲すこと能はず萬  
 物の均一なるを見て其本源なるを知り一源よりて  
 萬物を察すれば心定り神にありて永く平和を保持す

口約八〇廿五(羅)

べし  
 噫眞理なる神よ我をして際限なき慈愛の中に主と一  
 ちらしめ給へ我屢多くの書を読み多くの話を聴て倦  
 厭乏たることあり然れども我が願ひ我が望みは惟主  
 に在るのみ願くは識者をして盡く口を閉ぢしめ萬物  
 をして盡く主の前は黙せえめ主のみ惟我に語り給へ  
 (二) 人其心を一にし愈其意を誠よせば勞せずして許多の  
 高尙なる事物を曉り得べし是は天より智識の光を受  
 ければあり苟も淳朴安定の精神あるものは假令許多  
 の事業を執るも錯乱することなし必竟其爲す所の皆  
 神の榮光を現はさんとし中心頗る平靜にして毫も自  
 らの爲に圖る所なきを以てなり抑汝を煩妨するもの

は誰ぞ汝の心の制し能はざる慾情にあらずや善良にして神に敬従するの人は其爲さんと欲する所は必らず先づ之を心中に畫策し而して其事に臨むや過度の慾情を誘はるることあく惟正理に従ひて之を處斷せり誰か已に克たんとするものより激烈ある戦争を爲すものあらんや我等の専ら勉むべきは己に克ち日々強健を加へて善を進むにあり

(三) 今世に於て完全とする所は其中多少の不完全を混有し我等の保つ智識にも亦幾分の不明なきこと能はず神に近くの正路の深く學理を探究するよあらず惟謙遜にして己を知るにあり然れども學問を爲すの固より悪しきにあらず且何事を論せず萬事皆善として神

の定め給ふ所なれば之を知悉するは咎むべきにあらず惟博く事を識らんより寧ろ良心に従ひ行ひを正確にするに若かずと云ふのみ然れども人多くは徳を脩むるに力を用ふること薄くして只専ら智識を得んとするが故に心屢迷亂して其結ぶ所の果は殆んどなきが如し

嗚呼人喋々として事物の辨論に勞するが如く不善の根を斷ち善を植うるに汲々たらば世に夥大の害惡起らず又修道院の中に多くの放佚行ありれざるべし實に後世審判の日に於て我等が受くる所の審問は讀書の如何にあらずして其行爲の如何もあり又辨論の巧拙にあらずして敬神修徳の是非もありとす



汝試みに知る所の學士等の狀況を見よ彼等尙世に在るの日其富榮を極めたるも今は果して何所イッソクよりある他人代りて其地位を占め恐らくは先輩を思ふ事さへ稀あらん彼等在世の時多少の名望を有せしも今は其名さへ語るものなし嗚呼世榮の消亡する何ぞ其れ速なる乎

彼の人々が學者よして行爲能く其智識に伴はゞ其勉學讀書は大よ益たりしに惜哉世よは神に事ふることを忽カセ諸にし却て無益ある學事を勵み以て滅亡に陥るもの多し己れ謙遜の人たることを求めず卻て自ら尊大の人たらんことを欲して其思念を亂し愚なる心は尙蒙昧となれり

ハ羅一〇廿一、

ニ腓三〇八、

夫れ眞に尊大なる人の大なる愛ありて己の卑小なるを知り至高の光榮といへども更に心に淫することありし眞の智者は基督を得んが爲に世の総ての物を糞土の如く思ふものあり眞の博學者は神の聖旨を行ひ己の意思を棄るものなり

第四章 行爲を戒慎すべき事

(一) 総て人の言説意見は輕忽カセよ信すべきものよあらず惟慎んで神の聖旨に従ひ忍耐して徐ろよ計るべし然るよ哀哉吾人荏弱の常として他人の善事は擧ぐることおく却て其惡イタい信ニヤスじ易く言ひ易し凡て全き人は他の言語よよりて容易イタく信を措くことなし蓋し人は惡よ傾くの弱性ありて言語に於ては殊に誤失多きを

イ箴十四〇十五、

口雅三〇二、

知ればかり

(二) 大智は其所業輕卒ならず又己が獨見を固執することなし  
 憚て各人の言を輕信せず或は聽き或は信するも輕くしく之を人に漏すことなし  
 汝常に實直明智の人と相圖り單に己が所見に従ふことなく寧ろ己に優るものゝ教示を求むべし  
 人其身を修むれば從て神旨も適ふ智惠を得また許多の事に練達するを得人益謙遜に進み神に歸順すること愈深ければ隨て萬事に聰明にして其心も亦平康ならん

第五章 聖書を研究する事

(一) 聖書中よて求むべきものは能辨よあらずして眞理を

り總て聖書を讀まば之を記述せし前賢と同一の精神を以て讀むべし抑聖書中にて求むべき所は其説の巧なるにあらずして實益にあり

(二) 是故に簡略なる敬神の書は高尚にして深奥ある書よ於けるが如く熱心を以て之を讀むべし而して其記者の學識に付て其廣狹淺深の如何を問はず惟純然たる眞理を愛するの念を以て之を讀むべし又言語の其何人より發せしやを問はず惟其語れる所の意義に注意すべし人は皆時と共に消滅すれども主の眞理は永遠よ存せり神は偏頗なく我等も種々の法を以て語り給へり

(三) 我等聖書を讀むに當り其必要ならざることをも難問

詩百十七〇二

講論する奇好心の爲に屢已を妨害することあり故に聖書を読みて其身を益せんと欲せば偏に謙遜純粹及び信實の心を以て之を読み決して博識の稱を求むること勿れ好んで諸聖賢の言行を尋ね謹黙して之を聞くべし又長老等の譬喩を心よ厭ふこと勿れ蓋は故なくして發えたるにあらざればなり

第六章 過度の慾情

- (一) 人物を欲するの情、度に過ぐれば中心乃ち錯亂す驕傲貪吝なる者は決して寧靜を得ることなく心貧しく且謙遜なる人は常に平康を得て餘りあり
- (二) 未だ全く己を殺さざる者は些細の事物にさへ誘惑せられ且之に勝たるること甚だ速なり精神弱く肉慾壯

にして克く心を外物に奪はるゝ者は世慾を絶つこと至て難し故に斯の如き者は屢其慾を遁れんとして却て大に憂苦を覺ぬ人或は之に反對するものあらば爲に輒く憤怒するゝ至る又斯の如き人其慾よ從はゞ忽ち己の良心よ責められて心中大よ苦惱を覺ゆべし蓋し其要むる所の平康を得るゝ益なき慾情に勝を與へたればなり

- (三) 故に眞正の安寧を得んにハ慾情よ從ふことなく却て之と拮抗せざるべからず然れば肉よ屬し或は外物に溺るゝ人の心よは平康あることなく惟靈よ屬し熱心を以て神を恭ふ人の心にあるのみ

第七章 空望と驕傲を避くべき事

波前五〇五、

〔耶九〇三、四、  
哥前二〇三、二、三、四、〕

(一) 凡そ人を持み又他物に倚頼するは徒爾のみ耶蘇基督の愛の故を以て他人に事へ此世に於て貧賤とせらるゝも決して耻ること勿れ

汝己を持ます其希望は惟神に措くべし汝力の及ぶことは努めて之を爲せ神は汝の良志を補佐し給はん

汝己が智識を頼み又人の巧智に依ること勿れ寧ろ謙遜なる者を佐け傲慢なる者を卑しくし給ふ神の恩寵を持むべし

(二) 假令巨万の財産を有しまた權勢ある朋友あるも以て誇<sup>ホ</sup>威<sup>コ</sup>るに足らず惟万物を賜ひ特<sup>ニ</sup>親<sup>ラ</sup>を與へんと欲し給ふ神を誇るべし

汝體軀の長大なると容色の優美なるとに誇<sup>ホ</sup>傲<sup>コ</sup>る勿れ

是れ皆輕症の疾病にも傷痰せらるゝことあればなり

汝天賦の才智あるを以て樂となすこと勿れ恐らくは汝に總ての美質を賦與え給ふ神の聖旨を患<sup>ソ</sup>害<sup>コ</sup>ふことあらん

汝自ら人に優れりと思ふこと勿れ恐らくは人の中心を知り給ふ神の前には汝却て人より劣れりとせらるゝの憂あらん善事を爲すも以て誇ることを勿れ神の判定は遙かに人の判定より異り又人の悦ぶ所は多く神の惡む所あり汝若し善事あらば人に尚多くの善事ありと思ひ以て自ら謙遜を守るべし汝凡ての人に謙るとも害する所なしされど一人よだも優れりとせば其害や實に甚しとす謙遜なるものは常に平和の喜びを受

け驕傲なるものゝ心には屢嫉妬と憤怒を生ず  
第八章 過度の交親を慎むべき事

(一) 汝人毎に心を開きて語ること勿れ知者或は神を敬畏する人と共に事を議るべし濫りよ壯少者若くは未知者と深く交り親むべからず又富者に諂ひ或は好んで大人の前に出ること勿れ謙遜端正ある者敬虔徳行ある者と交り互に益あることを謀り談ずべし又婦女子と深く交親すること勿れ然れども凡て善良なる婦女子の之を神の恩恵に托せよ

(二) 常に神と其聖使と親しからんことを冀ひ以て人々の交知を避くべし我等能く万の人を愛せざるべからずされど万の人と深く親むは益あり我等他人の稱賛に

依て未だ謙らざる人を敬慕し而して直接相見るに至ては大に快らざることあり又我等人に交接し務めて其悦を攪らんと欲し却て吾が僻性を示し大に其人の不快を招くことあり

第九章 從順並よ人の支配を受くる事

(一) 從順にして長者の下よあり而して隨意に事を爲し得ざるは益多し蓋長者となりて人を治むるより從順にして人に治めらるゝは安然の道なり  
人よ從ふて世を渡るものありと雖も愛心によるにあらず只止を得ざるに出るもの多し斯の如き人は常に不満を懷き些少の事よすら眩くことあり若し自ら誠實に神を愛するの心より人に從ふよあらざれば決し

て心志の自由を得ること能はず汝安然を探討タツチて何處イッパツに奔走すとも長者の下に服従せざれば之を得ること能はず世間の人其居所を轉せば幸福を得んと妄想し却て已を欺くもの多し

(二) 人各其知覺好情に適することを爲し又同氣相求むるの情は天性の常なり然れども神我等の中に在さば平安を保つ爲め時として吾が意を廢せざるを得ず誰か能く万事を知り得るの智あらんや故に汝自らの意思のみ頼みとすることなく求めて人の所説を聴くべし

假令汝の思考完美なりと思ふも尙神の爲よ之を捨て他人の説に従はば汝に於て却て得る所あらん我屢

聞く人に向て己の意見を吐かんより人の意見を聞て之に従ふの安然ありと時として各の説一ならざるも皆其當を得たることあり然るゝ特別の理由あるに拘らず尙拒で他人の説を容れざるは驕激にして頑固なるの驗なり

第十章 多言を慎むべき事

(一) 汝力を盡して世の紛擾を避くべし何となれば假令信實なる心を以て世事に與かるも爲に大なる阻害を生ずることあり又我等は汚穢に染み虚事に陥り易ければなり吾言を發して後沈黙の勝れるを知り又人と交接して后之に接せざるの善きを覺ゆること屢なり  
(二) 人と談話するの際必らず其良心を害するものあり然

るに我等猶好んで輕々しく談話するは何ぞや蓋我等相互に談話するを好む所以は互に安慰を交換し平素多事に困憊したる心思を鎮靜せんが爲なるべし而して又の好んで思念し且言語を發するは我等の愛慕するもの或は吾が意に反して不快を感じる所のものなり然れども惜哉此思念言語は屢無益に屬し更に得る所なきことあり是他なし外部の安慰は神より享る内心の安慰を失ふこと少くならざればあり

(三) 故に我等の無益な時を費さるるが爲め警醒して祈らざるべからず汝若し語るべきの時機を得て心に益ありと思ひ務めて互に徳を建ることを談せよ世の悪習と吾が修徳の上達に注意することを怠るよより終

に其言語を慎まざるに至る然れども敬虔を以て靈魂上の談話を爲すは大に精神の發達を扶助せり况んや亦意氣相投合するもの神に在りて相集會するに於てをや

第十一章 平安を求め並に靈魂の上達を熱

望する事

(一) 我等若し己に關せざる他人の言行に干渉することなくして己を煩はすことなければ多く平安を得べし己れ世人の苦難を買ひ多く身外の事は注意し自ら省ることの稀なる者は永く平安の中にあることを得んや心の單純なるものは幸福なりこれ平安の悦び多ければなり

聖徒等の中完全よして思想深き者あるは何ぞや是れ全く世慾を絶つことを努めたるが故に赤誠を以て神に属従し自ら心閑裕なるを得たるなり

我等は深く私慾に耽り又眼前の世事よ傾くこと甚しく全く己が悪習よ打勝つこと稀にして日々上達せんことよ熱望せざるが故よ心常に冷淡薄情なり我等若し其胸臆を亂すことなく全く己を殺したるものとならば神の事を味ひ天上の事を考ふることを得べし我等第一の妨礙ハ慾情を脱せず務めて聖徒の完全の道を踐まず又一小禍よ遭ふことあらば忽ち其心沮喪し轉じて世人の慰藉を求むるにあり

(二) 我等若し勇者の如く戦場に立て戦はゞ速に天より神

の救ひの我等が上に來るを見るべし蓋我等をして勝を得せしめんが爲に戦端の時機を下<sub>レ</sub>給へる神は其恩恵に依頼して勇戦する者を助くるの準備<sub>ヲ</sub>へをなし給へばなり

我等若<sub>ク</sub>玄<sub>ノ</sub>實<sub>ニ</sub>に外面の儀式を遵守するを以て恭虔の上達を得んと欲せば神を敬慕するの熱心は忽にして其跡を絶つべし之に反して我等宜しく斧を樹根よ置き慾情を焚除して以て靈魂の安寧を保つべし

我等年毎に其一僻を根絶することを得ば完全の人となること至て速なり然るよ最初神に歸せし時の善良清潔を數年後の今日よ比すれば遙かに最初の優る所あるを見る



吾が熱心と上達は日々増進すべきものなるも其實然らず今僅かよ始めの熱心の一部分を存有することあらば以て美事となせり

若し始めに刻苦して善事を爲さば向來万事を爲すに易く且快樂なるべし吾が習慣を去るの難事なり又已が嗜慾に敵するは尙難しとす然れども易々たる瑣事に勝たざれば何ぞ其難事と勝つことを得んや嗜慾の發する時は速よ之に抗敵し悪習は努めて之を改悛めよ然らざれば恐らくは汝をして漸々至難に陥らしむることあらん

嗚呼汝謹慎するも依て心も平安を得他人も悦びを及すことを知覺せば必らず熱心に靈の上達を計るや疑

ひあし

第十二章 苦難の益

(一) 我等時々困難妨害に遭ふは益なり蓋災害は屢身を省みせしめ又此世に在るは恰も放逐者の如きものありと思ひしめ以て望を世事に屬くべからざるを知らしむればなり

吾も反對する者に遭遇し又善志を懷き善事を行ふ時に當りて他人より輕侮蔑視せらるるは是亦益なり斯の如きは謙遜の徳を養ひ虚榮も陥ることなからしむ若し人吾を侮辱し且吾を信せざれば神を衷心の保証とて求むるの念を切すればなり故に人の神に倚頼の心を牢固くすべしされば多く人爲の慰藉を要す

イ腓一〇廿三、

ることなし

(二) 善を求むるの人災害に陥り誘惑よ逢ひ悪念よ襲はるゝ時よ當ては特に神の欠ぐべからざると神に頼らざれば一の善事をも成し能はざることを覺るなり

此時苦難を受くるに依りて悲哀號泣して神に祈り又其時生を厭ひて死を求め速く世を逝て基督と俱に居らんことを望み又其時全き安然と充分の平康は現せよ於て得ることあらざるを確知すべし

第十三章 誘惑に敵すべき事

(一) 我等の此世よ生存する間は決して困難誘惑あきこと能はず約百記よ曰く夫れ人の此世に在るは戦闘にあらざるが如くならずやと故に各自勉めて誘惑に敵し警醒

イ百七〇一、

ロ彼前四〇七、

ハ全前五〇八、

祈禱して以て悪魔をして吾を欺くの機會を得ざらしむべし蓋悪魔は眠る時なく常に奔走して呑啜すべきものを探し索むればなり人は如何よ完全清聖なるも尙多少の誘惑よ遇ふことあり然らば則ち吾人にして全く之を免かるゝことを得んや

(二) 然れども誘惑は固より厭ふべく愛ふべきものなれども又屢身よ益ありとす人此に由りて謙遜を増し清潔に進み種々の經驗に富めばなり

凡て聖徒たる者は巨多の苦難誘惑を凌ぎて上達することを得たり誘惑を堪へ忍ばざるものは遂に墜落して亡びよ陥りたり

(三) 如何に聖職に在り又靜所に住するも決して苦難若く

は誘惑の不幸なきこと能はず如何なる人といへども世に在らん限りの誘惑の境界を全く免かるゝことなし夫れ我等の生れながらして貪慾の心を存有す是れ則ち誘惑の根元あり故に一の誘惑を脱し一の困難を除けば又別に入り來りて新陳代謝常に多少の堪へ忍ぶべきことあり蓋我等は元始の幸福を失ひたるものあればなり

(四) 人多くは誘惑を遁れんと欲して卻て深く之に陥ることあり我等は僅かに其場を逃遁するのみよては之れに打勝つこと能はず惟忍耐と謙遜の二を以て諸勁敵に勝るの能力<sup>チカラ</sup>を得べし  
惟外面に於て誘惑を避けて其根元を剷除せざれば決

して上達することなく誘惑は却て速に歸り來り且憂ひ益甚し

誘惑なるものは激烈手段を以て芟除すべきものにあらずして惟堅忍強耐せば漸を逐ひ神の冥助によりて終に之に打勝つことを得べし誘惑は逢ふ時は能く人と相謀り之に陥る者ある時は嚴威を以て遇することなく汝の人に爲られんと欲する如く宜しく懇切に之を慰藉すべし  
凡そ惡しき誘惑の始めは心志の鞏固ならざると神に依頼するの稀薄なるとに由れり恰も梶なき舟の波間に漂搖せらるゝ如く放縱にして堅志なきものは殊に誘惑に罹ること多しとす

(五) 火を以て鐵を試み誘惑を以て義人を利すと我等屢自ら爲し得べき力を知らざるごとあり惟誘惑は我等の眞價を示せり

然れども我等特は誘惑の始めに於て能く警戒せざるべからず是れ敵をして心の中に入らしめず初めて心の戸を叩くは當りて之を戶外は拒ぐときは其敵に打勝つこと誠は容易なればなり故に曰く「惡は須らく其始めに妨ぐべし惡漸く長ずれば藥を用ふるも及ぶことなし」と夫れ誘惑の成るは初め心思は萌し尋て詳に之を想像し次に之を爲すを樂とし次に之を爲さんことを希望し終に意を決して之は服従す斯の如く我れ初めに此強敵を拒がざれば漸く心中は侵入せらるべ

し若し人久しく怠りて之を防がざれば日々己の力衰へ敵は反て益強盛に至るべし

(六) 人或は神に歸するの始め直に大なる誘惑を受くることあり又久しきを経て初めて之に遇ふことあり或は殆んど生涯之は苦むあり又或は容易なる誘惑は罹ることあり是れ皆人々の情勢と價值とを計り撰民の幸福を完全せんが爲め萬事を定め給ふ公平全智ある神命の致す所あり

故に我等は如何なる誘惑に遇ふも敢て失望すべきにあらず惟総ての艱難に於て恤み助け給はんことを只管神に祈るべきなり蓋神は聖パウロの云ひし如く我等が其試惑を忍耐することを得る爲に試惑と共に逃

るべき途をも備へ給ふべし

神は謙遜の者を助けて高くし給ふが故に我等誘惑艱難に遇ふ時は其靈魂を神の大能の手下に置いて謙遜すべきなり夫れ人誘惑艱難に遇はば如何に己を益せらるゝやを証し其報賞は之より由りて益巨大とあり其德行は一層勝りて光輝を放つべし人若し微度にして熱心あるとも艱難に逢はざれば固より稱揚するに足らず然れども艱難に於て能く耐へ忍ぶことを得ば其上達し望みあること大なり  
人或は大なる誘惑を免るゝも却て日々に起る小なるものに敗るゝことあり是れ其小事に敗るゝによりて遂に自ら謙遜の心を生じ大事に於ては固より已

の特むべからざるを覺ゆしめんが爲なり

第十四章 暴議を避くべき事

(一) 汝自ら省みて他人の行爲を議すること勿れ他人を議するは徒勞にして誤惑多く且輕卒に罪を犯すことあり然れども自ら省察するの勞は實益あり

(二) 我等屢己の好惡に任せて裁決することあり此乃ち己の好む所に偏僻して容易に其當を誤る所以なり若し我が目的純然にして惟神に向ひ假令我が慾念に忤ふことあるも決して之に困むことなし然れども屢心中に潜むものあり或は他より入り來るものありて等しく我を誘ふことあり  
人多くは其行爲に於て秘かに己が利を求めて自ら知

らず如斯人は事の己が志意に適ふときは以て心の平安を保つが如くなれども若し其希望に逆て起る時の忽ち其心願ぎ憂ふべし

(三) 人の意見と判定は各異なるが故に朋友同邦人及び教友篤信者の間よも動もすれば葛藤を生ずることあり奮習は脱し難し人已の未だ見ざる所に導かるゝを好まず若し己の勉強と智慧に依頼して耶蘇基督の己に従順はしむる能力を特まざれば眞の光を得ること難かるべし蓋神は人をして全く其聖旨を遵奉せしめ且熱愛よりて総て人智の及ばざる所にも達せしめんと欲し給へばなり

第十五章 愛よりて行ひたる所爲の事

イ哥前十三〇三

(一) 如何なるものを望み如何なるものを愛するが爲よも一毫の悪をも犯すべからず然れども究乏の者を救恤する爲に善行を中止することあり又一層の善き行に換ゆることもあるべし如此は善行を消滅することなく却て一層優れるものゝ變化すればなり愛なき表面の行爲は固より益なし愛よりて行ふ處は如何に些少よして輕蔑せらるゝ事といへども其結ぶ所の果豊かあるべし蓋神の行爲の多少を以て人を量り給はず其行爲の出る源によりて人を量り給へばなり愛多きものゝ多くの事を爲すなり一事を能く爲すものは多くの事を爲すなり私意を狭まらず公衆の爲よ計るものは能く事を爲すなり

ハ前十三〇五、

ハ前十三〇四、

(二) 屢愛より出るが如くして其實私慾より來るの行爲あり蓋是れ生來の性僻自念報賞の希望及び己が益を計るの意常々去り難きが故なり  
 眞誠の愛心あるものは一事を爲すも己が爲ふせず万事惟神の榮光を顯はすのみを計畫す  
 私樂を欲せざるが故に人を妒まず又己を以て喜びとせず却て神に在りて幸福を享くるを以て第一の望とす  
 而して善事は皆人に歸せず悉く之を神に皈せり蓋萬事の泉源より水の出るが如く皆神に依て出で諸聖徒も終に神に依て喜樂平安を受くべければなり  
 嗚呼眞誠の慈愛を少許たも有するものは直に世間萬

物の全く空虚なるを知らん

第十六章 他人の缺點を堪へ忍ぶ事

(一) 己或は他人に於て改むる能はざる事は神の矯正し給ふまで忍耐すべし斯事や或は己を練達忍耐せしむるならんと思へよ若夫れ之れをければ徳行は貴重するに足らざるなり然れども此妨害に逢はば神汝を助け甘んじて忍耐する力を與へ給はんことを祈禱るべし  
 若し人を説諭すること再三に及ぶも敢て聽從せざれば之と争はずして全く神に托せよ是れ神の能く惡を化して善となすことを知り給へば其臣僕シモベをして聖旨を成し榮光を顯はさしめ給ふべければなり  
 (二) 他人に如何なる缺點あり懦弱あるも之を忍耐するを

勉めよ汝も亦他人に忍耐せらるべき事多ければあり  
 汝自ら欲する所の人の如くなることを得ざれば如何  
 にして他人を悉く我が欲する所に化するを得んや  
 我儕は勉めて人を完全ならしめんと欲すれども己の  
 過失を改むるは却て吝なり我等は他人の嚴に謹めら  
 るることを望みて自ら謹めらるることを好まず人の  
 自由の無限あるを惡めども己の望みを妨げらるるこ  
 とを欲せず人の苛酷の法律に束縛せらるるを欲すれ  
 ども己は之に制せらるるに忍びず  
 故に知る隣人を見ること己の如くあること稀あるを  
 (三) 若し人皆完全ならば我等何をか神の爲に他人に對し  
 て忍耐するの要あらんや然れども今や神は世の事を

加六〇二、  
 全六〇五、  
 哥后三〇五、  
 箴三〇七、

定めて吾人互に重荷を負ふことを習はしめ給へり人  
 誰か過失なく重擔をく足らざることなくして完全の  
 智識を有するものあらんや然らば乃ち吾人互に重荷  
 を負ひ相慰藉扶持し相教諭せざるべからず  
 各人持する處の徳行の如何の禍災の時よ於て判然と  
 して分るべし是れ禍災は人を軟弱するにあらず惟人  
 の性質如何を示すものなればなり

第十七章 修道院者の事(以下四章は特に修道院者の爲に記したるものなり)

(一) 汝人と平和親睦を保たんと欲せば許多の事に於て己  
 が欲する所を棄ることを學ぶべし修道院若くは公共  
 會院杯に居りて同輩と睦くことなくして交際し死よ  
 至るまで忠信なるは是れ決して小事にあらず能く茲



腓十一〇三三、

哥前四〇十、

よ生活して幸福に其生を終ふる者は實に祝すべき哉」  
 若し汝の爲すべき義務ある如く茲に堅く立ち且上達  
 せんと欲せば宜しく自ら地を在りては逐客あり賓旅  
 ありと思ふべし實に修道者の生涯を送らんと欲せば  
 基督の爲に愚者とせらるゝことを甘せざるべからず  
 修道者の法衣を着け頭髮を剃るは益少し眞誠の修道  
 者とあるは惟風習を變化し全く情慾を殺すにあるの  
 み

(二) 夫れ神に奉仕し己が靈魂の救ひを求むることよのみ  
 其心を用ひずして之を他に馳する者は惟患難憂愁の  
 外得るものなし又卑小者となり他人に使事すること  
 を望まざるものゝ永く平安を保つこと能はず

汝の爰に来るは決して人を治めん爲よあらず却て之  
 よ使事んが爲なり又汝の召されたるの怠惰りて空談  
 に時を費さんが爲にあらず困苦勞働せしめんが爲な  
 るを知れ茲に在て人の試みらるゝは恰も爐中の金の  
 如し茲に在る人は乃ち全心を以て神を敬愛し爲よ謙  
 遜らざれば如何で立つことを得んや

第十八章 聖列父の龜鑑

(一) 聖なる列祖の活潑ある龜鑑を觀察し眞實の完全と敬  
 虔の其中に耀くを見よ我等の今日爲す所は如何に小  
 にして殆んどなきが如きを覺らん嗚呼彼等と比較せ  
 ば我等の生涯は果えて如何ぞや基督の聖徒と朋友等  
 は饑渴、寒凍、裸体、勞働、困憊、徹夜、禁食、祈禱、聖き默想、許多

の迫害、罵責是等の苦難に堪へて主<sup>ツカ</sup>に使事たり、噫基督の聖蹟を踐まんと務めたる使徒、殉教者、唱道者、處女及び其餘の者が受けたる悲むべき苦難は幾何ぞや、是れ彼等の無<sup>カ</sup>窮<sup>キリ</sup>なき生命を保んが爲に此世の生命を惜めばなり

嗚呼列祖の中<sup>ニ</sup>は彼の荒野<sup>ニ</sup>於て嚴格にして己を棄てたる生涯を送りしは如何ぞや、永く悲むべき誘惑を受け屢敵<sup>ニ</sup>襲<sup>ハ</sup>れ、數々只管の祈禱を神に捧げ、嚴重なる禁食をなし、又靈の上達を謀りて熱心し、其情慾<sup>ニ</sup>克んが爲には強き戰を爲し、神を欣慕して心を清潔單純にしたるは如何ぞや

晝は勞働<sup>ニ</sup>從事し、夜は長き祈禱を勉めたり、其勞働の

間も尙默禱して止まらず、彼等は光陰を徒消せず、神に奉仕せんが爲には其時の短さを覺<sup>ハ</sup>じ、沈思によりて大なる快樂を感ずるが故に、肉體營養の必用すら忘却する<sup>ニ</sup>至れり

彼等は凡ての富貴名譽、朋友親戚を棄て、世<sup>ニ</sup>屬けるものを望まず、生存に要用なるものも敢て取らず、仮令身體の必要に迫るものあるも之に勞役するを憂ひたり、故<sup>ニ</sup>は彼等は世の物<sup>ニ</sup>於ては貧困なれども、神恩と德行には甚だ富有なり、彼等の外貌は至て貧しけれども、内心は常に神の恩藉と快樂に充てり

彼等の世に對しては疎濶なれども、神に在ては近親の友たり、自ら我身を願れば有るものなきが如く、又世<sup>ニ</sup>

は卑しく見ゆれども神の眼に貴くして撰拔せられたるものなり彼等は眞の謙遜より立ち純粹の柔順に活き愛と忍耐に於て行歩す故に靈魂日々益上達し神の前に大なる恩恵を得たるなり

彼等は是れ諸修道者の模範として與へられたるものなり我等は懦夫に習ひて怠慢せんより寧ろ列祖に従ひて上達に熱心すべし

(二) 嗚呼修道院組織の當初に於て修道者の熱心なりしに果して如何ぞや其心を専ら祈禱し用ひ徳に於ても他に勝らんとの大望を懷き甘んじて嚴正なる罰則を守り長者の治下に在て尊敬と従順を表せしは實に感ずるに餘りあり彼等は實に神聖完全なる者にして且大

なる勇氣を奮ひて世を足下に蹂躪せたるものなり其行跡の今尙明らか之を證するに足れり

今や院中の法律に觸れず入院の規約を堪へ忍んで守る者は我等の中に於て大人といはるゝなり嗚呼今時の冷淡怠惰なる何ぞ一に茲に至るや我等の斯くも迅速に當初の熱心より離れ冷淡懦弱に驅られて生涯を懶しとするに至れり

汝屢熱心家の模範を見れば徳に進まんとするの心汝の中にも眠らざらんを余は深く希望する所なり

第十九章 善良なる修道者の修行

(一) 善良なる修道者は總ての徳誼を充たさるべし蓋他人に見らるゝ外貌の如く其中心も亦同一あらざるべか

らず實<sup>ニ</sup>外に顯はるゝものより其内なる心に於ては  
 一層の美德を備具<sup>ツナ</sup>ふべきなり蓋は我等を照鑒するも  
 のは神なればなり我等の如何ある所<sup>ニ</sup>在ても特に神  
 を尊敬し其目前<sup>ニ</sup>於ては天使の如く極めて清廉を以  
 て行<sup>フ</sup>歩<sup>ム</sup>むべきなり  
 我等は日々に其志を新<sup>ニ</sup>し恰も初めて神に歸したる  
 日の如く已を勵まし左の如く云ふべし曰く「主なる神  
 よ我が善き志を助け主に仕ふる清き勤勞をなさしめ  
 給へ從來我が爲<sup>ス</sup>えし所業<sup>ソノ</sup>ハ無益なれば今日より完く  
 始<sup>メ</sup>むることを得させ給へ」と

我等の靈の上達の多少は其志望に應じて定めり故<sup>ニ</sup>  
 多く進まんと欲するものは多くの勤勞を欠ぐべから

す

若し志堅き者にして尙失敗すること屢なりとせば志  
 を立ること薄く又決心なき者果して能く何事を爲  
 し得んや我等が立志を敗るは種々の事情ありと雖も  
 故なくして修行を怠ることあれば靈魂の上には幾分  
 の損害を來さゝること稀なり義人の立志は自己の智  
 恵に由るにあらず只神の恩恵<sup>メグ</sup>に據れり故<sup>ニ</sup>彼等何を  
 爲すにも常に神に據らざることをなし蓋事を爲すは人  
 よあり事の成るは神よあり人は自ら其步履を定むる  
 こと能はざるあり

時として信仰上の爲か又は兄弟を扶けんが爲常例の  
 修行を欠ぐことあるも此<sup>コ</sup>は後に回復すること容易な

へ箴十六〇九、

日耶十〇廿三、

るべし然れども怠慢ある心或は疎忽よりして輕々しく此修業を廢スッるは大なる罪科にして亦己が爲よも大害あるべし

我等は全力を盡して勤むるも猶多くの事よ於て及ばざることあり然れども其達せんと欲する目的は豫め定めざるべからず特に己を妨害するものよ對しては之を定むること肝要なり

(二)我等の外觀と内情とを審査整理せざるべからず是れ共に靈魂上達に大なる關係を有すればなり  
常に己を省るゝ難しとするも尙少くも毎日一回朝或は夕に於て之を爲すべし朝に於ては善き意志を定め夕に於ては其爲したる所即ち己が言行思想に於ける

舉動は如何ありしやと省察すべし恐らくは神と隣に向て罪を犯せしこと數あらん  
汝丈夫の如く腰に帶し惡魔の侵襲を抗し食慾に轡を置くべし然れば凡ての肉慾を抑制することを得ん全く身を怠慢に處することなく讀書、寫字、祈禱、默想、或は公益の事業を勉むべし身体を習練するは彼我同一あるを得ざれば各適宜にすべし  
一般にあらざる修行は決して之を公になさずして陰ヒソカになすを安然とす然れども一般の修行を怠りて私定のものゝ勵むゝ謹むべし汝の規定されたる所は欲げなく誠實に成し遂げたるの後尙餘間あらば信仰の望む所よ從ひ己の修行をなすを得べし

各人同一の修行を用ふること能はず彼に利あるものと是に益あるものとは自ら異れり且時節の異同によりて其修行も亦同じからざるべし聖日に適するものあれば又平日に適するものあり或は誘惑の時に要し或は平和の日よ要し又は憂悶の時よ求め或は主よ在て喜ぶの時に求むるものあるあり

大齋日に當ては善き勤めを新にし又特よ篤信の人の仲保を求むべし聖日と聖日の間よの志を立て恰も次回の齋日に此世を辞えて永遠の佳節に與らんとするものよ如くすべし是よ由て日ならず神より勤勞の報酬を受けんとするものよ如く此聖節に於て謹て充分なる豫備をなし清潔を専とし總ての規例を嚴格に

守るべし

八羅八〇十八、

二路十二〇四三、四四、

然るよ受報の日尙未だ至らざらんよの自ら充分よ備へずして定期に當て必らず現はるべき大榮光を受るよ足らざるものなりと悟り一層勉めて辞世の豫備をなすべきなり聖路加云へることあり曰く其主の來る時に其目を覺し居るを見なば此僕は幸福あり眞よ我汝等に告げん其所領モチを皆彼に主ツカサドらしむべしと

第廿章 獨居靜黙を愛する事

- (一) 都合よき時を撰びて獨座し神の恩恵を默想せよ好奇心を避け又讀書の時空しく頭腦を煩すべきものよりも寧ろ痛悔の念を生すべきものを撰エ擇ラむべし
- 若し汝雜談漫遊をなし或は奇聞風評よ耳を側ること

等に遠ざうらば良き思想を練るに充分なる適應の時間を得べし。古の大聖徒は時機を得て人と交はることを避け陰に生涯神に奉仕することを選びたり。或人曰く「我人と交はりて歸る毎に多少人たるの品格を卑くせるを覺ゆたり」と我等久しく人と談話する時は此語の眞なるを知れり己が必用を超えて語るを謹むより寧ろ初より沈黙するは容易なりとす戶外に於て正しく身を修むるより室内に潛居するは甚だ容易なり。故に聖靈の示せる奧義に達せんと欲せば須らく群衆雜沓を避けて耶蘇と共にあらざるべからず。

(二) 獨居を甘んずる者よあらざれば戶外より出ること安然ならず人に治めらるゝことを甘んずる者にあらざれば人を治むること安然ならず能く人に服従するを學びし者よあらざれば人を制すること安全ならず良心の責めなき者にあらざれば喜ぶこと安全ならず。然れども尙聖徒の安全は神を敬畏するの心常に充實せり而して彼等は大徳を備へ神恩に秀るも一層戰慄と謙遜を欠くことなし之に反して邪惡の人の安全は高慢と倨傲より成るが故に終に變化して己を欺くに至れり。汝善良なる遁世者或は篤信なる獨居者と見ゆるも此世に於ては決して安全を望むべからず人よ尊敬を受

け其徳ありと思ふものは自信の過ぐるを以て屢危難  
に陥ることあり故に人は全く誘惑を蒙らざるより寧  
ろ度之に刺撃さるるを利ありとす然らざれば安に  
過ぎて忽ち傲慢の心を生ずる若くは擅に外部の穩  
慰藉を慕ふに至らん

(三)

噫若し人浮雲の歡樂を求めず世事に苦心せざれば其  
心の清潔なること如何ぞや若し又無益ある思慮を悉  
く脱去し只敬神と有益なることを考量し凡て望を神  
に托せば其平康安心は亦如何に大あるべき乎  
聖き痛悔を務むるものにあらざれば決して天の安慰  
を受くるの價値あることなし心の深底より痛悔を覺  
ゆんと欲せば宜しく汝の閑房に入り世の風潮に遠ざ

提後二〇四、

ハ太六〇六、

二詩四〇五(羅)

かるべし録して汝の室房に於て悲歎カナシめとあるが若し  
室外に於て數々失ふものも室内に歸りて之を再拾す  
ることを得ん其室に入ること頻繁ならば從て之を好  
む心も亦深きに至らん然れども之に入ること稀粗な  
らば忽ち倦怠の心を萌生せん故に起信の當初よりし  
て絶えず室内に在ることを勤れば遂に汝の良友とな  
り最も快き慰となるべし  
敬信の心は沈黙靜座に依て進歩し且聖書の奧義を習  
ふべし此沈靜の座側に於て彼の涙の川流を見認め之  
に就て毎夜已を洗ひ潔むることを得べし是故に世の  
紛擾を隔つこと益遠ければ造物主に親昵すること彌  
密あり又知人朋友に遠る者は神其聖使を率ひて近



付き給ふべし

(四) 己を省みずして大なる休徴を顯はさんより寧ろ身を  
静閑<sup>レ</sup>處して自ら謹慎するの勝れる<sup>レ</sup>如かず修道者  
の外出する稀にして人を見或は人に見らる<sup>レ</sup>ことを  
好まざるは讚むべき哉

汝何ぞ已<sup>ク</sup>所有<sup>ス</sup>歸すべからざるものを見んと思ふ  
や此世<sup>ト</sup>其慾<sup>ト</sup>の共に逝ぎ去らんと肉慾は我等に外  
出を催して外に漂泊せしむ時過て家<sup>ニ</sup>歸れば果して  
何の得る所ある<sup>ク</sup>只良心の憂と紊亂を醸するのみ喜  
ばしき<sup>カド</sup>首途<sup>ヲ</sup>は屢悲しき歸着を生じ樂しき夜の深更は  
悲しき晨の原なり斯の如く凡て肉<sup>ニ</sup>屬する喜樂は其  
入り來ること甚だ徐かなれども終<sup>ニ</sup>蛇の如く噛み傷

ホ約壹二〇十七

ハ箴三〇二二三

けて死<sup>ニ</sup>至らしむ  
此院中に於て見るを得ずして他所に於て見るを得べ  
きもの果して何ぞや茲に天あり地あり又諸の原素あ  
り萬物是に由て造られざるものなし  
汝何所<sup>ニ</sup>行くとも永く宇宙に留まるものを見ること  
を得んや汝恐らくは満足を得んと欲すれども曾て之  
に達し得べき<sup>ニ</sup>あらず假令汝の目前に萬物を並列し  
て見ることを得るも只是れ空虚なる光景<sup>ニ</sup>あらず  
や

宜しく汝の目を擧げ最と高きに在す神に向て罪と怠  
を赦されんことを祈禱るべし空虚なる事は空虚なる  
人<sup>ニ</sup>委ね汝は惟神の命<sup>ト</sup>給へる所に其心を専らにせ

よ汝宜しく戸を鎖して汝の愛する耶蘇を招聘マテき彼と共に汝の室房に止るべし蓋室外に於ては此の如き平和を得ること能はざれば亦り汝外に出でず又風評を聞かざりしならば心意の寧靜を保ちしあらん然るも時々新奇を聞かんことを願ふが故に其心は不穩を覺ゆるは當然なり

第廿一章 心の痛悔

(一) 些少なりとも上達せんと欲せば須臾も神を敬畏するの心を放たず又過分の自由を願ふべからず自ら五感を抑制し愚蒙の遊樂に沈溺すると勿れ而して心の痛悔を専らとせば必ず之に由りて微信を得べし夫れ痛悔は多くの善事を發揚し遊惰は却て速に之を失はし

む

人若し己の放逐せられたる状況及び己が靈魂の多くの危険なるを思量せば尙此世に於て全き喜悅を得るは實に奇怪といふべし我が心の輕薄と其誤りを深く意とせざるよりして靈魂の憂苦をも覺ゆるに至る是故に正に哭すべき時に於て漫りに笑ふこと屢あり神を敬畏オソれ良心に従ふにあらざれば眞正の自由正實の歡樂あることなし

総ての紛雜なる妨害を抛棄し只切に聖なる痛悔を求むるものは幸福なり己の良心を汚濁し且憂へしむる総てのものを棄るものは幸福なり  
(二) 丈夫の如くして惡と争へ然らば慣習を以て慣習に克

つことあるべし。汝若し人の事に干與<sup>アツカ</sup>らずば人も亦汝を妨ぐることなからん他人の事務<sup>アツカ</sup>に干渉<sup>アツカ</sup>り或は高貴の人の事情に干與<sup>アツカ</sup>ること勿れ汝自ら注意し其愛友に先て宜しく已に嚴戒を加ふべし。人に親愛せられざるを悲むこと勿れ惟篤信にして神の僕と稱せらるゝに足る行爲を缺ぎ献身せし修道者の如くならざるを愁ふべし此世は於ての慰藉殊<sup>ニ</sup>肉<sup>ニ</sup>屬する慰藉を多く有せざるは人の爲<sup>ニ</sup>許多の益ありて且安全あり未だ嘗て天の慰を得ず或は之を覺ゆること稀あれば其責を已に歸せよ蓋其慰を得ざるものは心の痛悔を求めず又総て無益なる外部の慰を抛

棄せざるが故なり。汝天の慰を受くるは足らず却て多く艱難を受けざるべからざることを自ら悟るべし人若し全く悔ゆる心あらば此世の事は総て悲歎にあらざるなきを知らん(三)善良の人は悲哀哭泣の原因を覺<sup>レ</sup>ざることなし蓋内<sup>ニ</sup>自ら省み外隣人の狀況を察するは苦難を受けずして此世は生存するものなきを知ればなり自ら省ることに深ければ悲むことも亦深し。正實なる悲哀と内心の痛悔の原は我等の罪と過なり我等之に沈溺するを以て天に在るものを考察すること稀なり。長壽を思はずして死の事を考察すること屢なれば切

は其身の過失を改悛すること必然なり若し心して來世の刑苦を思考せば此世に於て如何なる勞苦をも厭はず嚴格なる法則をも避けざるに至らん然れども是等の事を心に入れず尙已を喜ばすべきものゝみ愛するを以て我等は常に冷淡にして太だ鈍きなり我等賤しき肉体として容易に不満を生ずるは是れ全く我精神の柔弱なるに由るなり此故に我等に痛悔の靈を賜はらんことを謙て主に祈り且彼の預言者の語を以て謂ふべし曰く主よ涕のパンを以て我を養ひ多量の涙を以て我を飲ましめ給へど

第廿二章 人類の艱難を思察する事

(一) 汝何の地に在るも何の方位に向ふも惟神に歸向はさ

イ詩八十五(羅)

れば憐むべきものあり汝願望の達せざるを何故と憂ふるや萬事意の如くなるもの果して何所にかある我も汝も地上の人々も皆亦然り或は帝王たり或は法王たるも凡そ人として多少の忠難欲望なきこと能はず然らば則ち望まじき地位を占むるものは誰ぞや惟神の爲に患苦を忍耐する力あるものなり懦弱なるもの屢語をなして曰く見よ某の生涯は如何に幸福なるや其富貴と權威を有するは實に羨むべしと然れども目を舉げて天の幸福を見れば此世の幸福は総て空虚なるのみならず實に頼むべからずして寧ろ煩雜に過ぎたることを知るべし蓋此等のものを領

せんと欲せば憂慮と恐怖の必らず伴ふものなればちり此世のものを饒ユダうに領するを以て人の幸福となすべからず惟應分のものを以て足れりとするべし人の此世に在るは實に艱難あり人若し靈に属くことを求むること彌切なれば此世の辛酸を感ずること倍切なり是れ乃ち人類の汚穢を覺ゆ現實に之を見るよりてなり蓋飲食、起臥、勞息、或は其他の天性の必需に應ずるは総ての罪より離れて自由を得んと欲する熱心者の爲に實に大なる艱苦なること言を俟たざるなり我等の此世に在るや内心は其体軀の必要によりて多く苦めり故に預言者は之を免れんことを切に祈禱1りて曰く嗚呼神よ我を必要の艱苦より救済スひ給へと

イ詩廿五〇十七、羅

然れども禍なる哉己の患苦を知らざる者よ此艱苦と汚悪なる生命を愛する者は禍なる哉茲に人あり其勞働若くは乞丐によりて僅か己の必要を辨ずといへども大に此世を愛するが故に若し永く此世に在ることを得ば天國のことは更に思はざるに至らん深く此濁世に沈溺し肉に屬くもの外は何をも心よ介まざる輩は如何に不忠愚魯ならずや彼等は不幸なるものにして其終りに臨み其嘗て愛せしものより卑くして且虚しきを感憂するに至らん之より反して神の聖徒基督に忠信なる友は肉を喜ばずもの或は此世に於て榮ふるものを意とせず惟其完き望と熱願を以て無限の榮福を慕へり彼等は目に觸る

口來十〇三五、

うものを望みて賤しきものに誘はるゝことあらん  
 が爲よ其全望を移して確然不朽目以て見るべからざ  
 る天に在るものに置けり  
 我兄弟よ靈魂上達の希望を抛棄すること勿れ時尙あ  
 り今其時なり汝何故に善き志を日々遅緩に付する  
 や瞬時よ起て之を始め而えて斯く云へ今は事を爲す  
 べきの時なり今は戦ふべきの時あり今は自ら改むべ  
 きの時なりと  
 汝憂ひ若くハ苦難の事に遭遇せば是れ則ち神より報  
 を得るの時至れりと知るべし汝歡樂安寧の地に入ら  
 んとすれば先水火の中を經過せざるべからず汝自ら  
 強ゆるにあらざれば過失に勝つこと難し

ハ詩六十六〇十二、

三詩五七〇一、(羅)  
ホ哥后五〇四、

肉身の朽果てざる限りは罪科と倦厭苦惱あくして此  
 世に在ること能はざるなり我等総ての苦難より逃れ  
 て安然を得んことハ望願ふ所あれども一旦罪過によ  
 りて天性の清淨を失ひ併せて眞正の幸福をも失ひた  
 れば罪障消滅して死生よ吞まるゝ時至るまで宜しく  
 耐忍して神の恩恵を待つべきなり

(二)  
 人性の脆弱なるは實に大よして常よ罪惡に陥ること  
 多し今日罪を懺悔するも明日よ至れば其懺悔せし罪  
 を再び犯し今茲よ謹慎の志を立つるも暫くして嘗て  
 其志を立てざるものゝ如く行へり實に我等は脆弱に  
 して且輕薄あるものなれば一に已を謙遜り固より自  
 尊の念を懐くべからず若し夫れ已の心よ怠慢の念を

生ぜは多く苦勞し神の恩惠よりて漸く得たるものも速く之を消亡することあり斯く速く冷淡ならんとする我等の終結は果えて如何ぞや我等の行爲に於て一も眞正の清淨を表するものなきに既く全く安然平和にあるものゝ如く自ら安せんと欲するは禍なる哉

我等新入院者の如く再び善き行ひに付て教訓せらるべき多くの必要あるなり然れば幸よして今より心を改め靈の事に上達すべき望或はあるならん

### 第廿三章 死を考想する事

(一) 現世の終結は甚だ速かなれば其將さに来らんとする未來に於ては如何あるべきやを考究すべし人は今

日此世に在るも明日忽ち見ゆることなし而して人若し其眼界の外に去らば亦其心より放たるゝは必然あり  
嗚呼人心の魯鈍と頑硬なること終く人をして未來の事を棄てて只目前のことに汲々たらしむ汝の思想と行爲を慎みて今日若くは後刻將さよ死に臨まんとするものゝ如くすべし汝若し良心に責めなければ死は恐るゝに足らず死を遁るゝに寧ろ罪を避くるの優れるよ如かず若し今日に於て準備完からずば明日は果して如何なるべきか固より明日は特むべからず汝生を明日に保延クモツことを何に由て豫知する耶  
我言行の善きよ改まる所斯く僅少あれば永く生を此

世は保存タモツも何の益あらんや嗚呼生命の永きは我言行を改むる機會にあらずして却て屢其罪を増加せり願くば現世に於て一日たりとも無瑕の日を得んことを人多くは起信の後より今に至るの日を算すれども言行を改悛するの果は寔は少々あり夫れ死は恐るべきものとせば生命を永く保持するは尙危殆なるべし常に死期を己の眼前に置き日々死の準備をなすもの幸福なり汝若し他人の死するを見れば己も亦同じく此途を逝くものと心に留むべし朝に在りては復た夕ありと思ふ勿れ若し夕到れば敢て翌朝を期すること勿れ汝常に充分の準備をなし其準備なき時死の汝に臨まざる生涯を送るべし人多くは不意に死す是れ人

の子思ははざる時に來り給へばなり汝其終りの時來らば過去の來歴に就て異なる想考を起し等閑と怠慢とを以て世を過しことを大に歎息せん

(二) 今務めて其死期に満足すべき生涯を送るもの智者にして且幸福なるものあり我等の幸を以て死する望を與ふるものは全く此世を輕んじ諸徳に進歩せんとするの熱心を懷き規率を愛し痛悔と勞苦を忍び能く命令に服従し又己を棄てて基督を愛する爲は如何なる災變にも耐ふること等なり

汝健康あるときは多くの善事を爲し得ることもあるらん然れども疾病の時に當て何を爲し得んや余之を知らざるあり病に依て善に進み且心を改むる者稀



口耶十七〇五、

ハ哥后六〇二、

なるは恰も多く外に漂泊するによりて聖に進むもの  
 少なきが如し  
 朋友親族に依頼すること勿れ又汝の救を鞏固にする  
 を遅緩すること勿れ夫れ人の汝の思ひより早く汝を  
 忘卻せん他人の助けに依頼するより寧ろ速かに茲に  
 注意して遅緩せず時あらば善事を爲すべし汝自ら注  
 意せずば後に誰か汝の爲に注意せんや  
 時の今貴し今の救ひの日あり今は恤みの時なり汝後  
 の永生を購ひ得べき時と徒らと時日を費すは如何に  
 悲むべき哉言行を悛むる爲と一日或ハ一刻を請ふの  
 日來らん然れども其願ふ所果して允さるゝや否は吾  
 知らざるあり

嗚呼最も親愛あるものよ汝若し常と死を恐れ之を忘  
 るゝことなければ如何に大なる危難を逃れ如何と大  
 なる畏怖より脱することを得べきぞ  
 死に臨んで恐るゝことあく却て喜びを懐かんと欲す  
 るものゝ如くして此世を送ることを勉めよ今此世に  
 對して死することを習へ是れ後に基督と俱に生活を  
 始めんが爲なり總て世の物を輕んずることを學べ是  
 れ後と自由に基督と往くことを得んが爲なり又汝の  
 身を毆て痛悔すべし是れ後に確然たる企望を保んが  
 爲なり

(三) 臆愚かなるものよ一日も其生命を自保すること能は  
 ざるに何に由てか永く壽命を保つものと思ふや人の

詩百四四〇四、

路十二〇三三、

多く欺かれつゝ不意に此世を逝れり汝屢風聞を耳に  
 せざるか云く彼の殺害に遭ひ是は溺死せり某は高所  
 より墜ちて其首を傷け死し或は食事の際又は游戲の  
 時に頓死し或は火に燒かれ刃に没し或は疫癘に斃れ  
 又或は賊刃に害せられたりと其れ斯の如く人の終結  
 をあすものハ皆死あり實に人生は影の如く不意に逝  
 ぎ行くものなり汝死するの後汝を紀念するものは果  
 して誰ぞや又汝の爲に祈る者は誰ぞや  
 愛するものよ憤然として立ち其力の及ぶ限り今勉め  
 爲すべし是れ汝は其死する時をも知らず亦死して後  
 何事の來るかも知らざるあり今時あらば永久の富を  
 積み蓄ふべし汝救の外他事を思はず惟神に屬くこと

路十六〇九、

彼前二〇十一、

來十三〇十四、

申三二〇廿九、  
來四〇十三、

を意とし神の聖徒を敬ひ其行爲に習て以て之を友と  
 すべし是れ乏しからんとするとき汝を永遠の安宅に  
 接待<sup>ムカヘ</sup>ん爲なり

地に在りては賓旅寄寓者の如く此世の事に關係する  
 ことなくして其身を保つべし此所に永住の城市を有  
 せざるが故に汝心を擧げて神に歸し涕を添へて日々  
 の祈と歎きを捧ぐべし蓋は汝死して後其靈は幸に主  
 に達せんが爲あり アーメン

第廿四章 審判と罪人の刑苦

(一) 萬事に於て汝の終末を熟考し如何にして彼の嚴格な  
 る判官の前に立つに足るゝを注意すべし彼の前には  
 物一として隠るゝことを得ず固より彼は賄賂を以て

其罪を輕減せず又遁辭を容れず只正實を以て其判決を爲すものなり

嗚呼汝時として怒れる人の面前をも恐怖する愚かなる罪人よ汝の諸惡を知り給ふ神に向ては何を以て之に答へんとする乎汝何故に審判の日の爲に勉めて準備せざるか此日に於ては人に辨護を托すること能はず蓋し人々皆其負ふ所の荷重ければなり今は汝の勞苦益あり又其涕も受け入れられ悲號も聞われ汝の悲歎の罪を消滅するの力あり

夫れ他人より虐待を受くるも己が爲に之を怨恨せず却て其人の惡の爲に悲み己を責むるものを快く祈り誠心より彼等の罪を恕し己の過失を謝するに疾く怒

を發するより憐みを起すこと速にして屢己を強ひ身体舉げて靈も服する耐忍深きもの爲には是れ大且有益なる練罪所なり  
後の清板を受んとして其罪を保つ今罪を清め惡を去るの善きに如らざるなり實も我等の濫りに肉を愛するが爲も自ら欺くものとなれり彼の刑火の薪となるものは汝の罪の外又何物もあらんや故に汝今自らの辛苦を厭ふて肉に従ふこと多ければ後ち汝の罰せらるゝことも益重く恰も刑火の爲に其薪炭を蓄ふるが如し

(二) 抑人の犯せる罷は偶此れが刑具とあるなり惰夫は熱鎚を以て刺され貪食者は無上の飢渴を以て責られ奢

侈放蕩の者は燃ゆる歴青ベツクと臭き硫黄の中よ浴し嫉妬  
 の者は狂犬の如く悲號すべし夫れ罪として相應の苦  
 楚之よ伴はざるものあし高慢の者は耻辱の中よ入り  
 貪慾の者は苦しき貧究を以て責めらるべし  
 彼所に於て一時間の苦楚は此世よ於て百年の最も劇  
 しい痛悔よりも重し此世よ於ては勞働の休憩友人の  
 慰藉を受くるも罰せられたるものよ爲には安息慰勞  
 あることなし  
 今汝罪の爲に憂慮すべし是れ裁判の日よ恩惠ソまれた  
 る民と共に安全ならんが爲なり  
 此時に當りて義者は奮然として已を抑壓せし者に向  
 て立ち今謙りて人の裁判に服する者も彼の時は人を

裁判せんが爲よ立ち貧賤の者の確き望を有し倨傲の  
 者は恐怖の中に圍まれん彼の時に到てん此世に在て  
 基督の爲に輕蔑せられ愚なるを習ひし者は却て智者  
 なること現はるべし  
 彼時到れば耐忍せし迫害は我等を喜ばしめ諸罪の口  
 は閉られ熱信の者は喜悅し神を恭敬せざる者は悲み  
 己を制せし者は奢を極めし者の喜びに優り襤褸の服  
 は耀き錦繡の衣の敝汚と變じ茅舎は却て金殿に勝り  
 地上の諸權も耐忍の利にの比することを得ず  
 彼の時到れば單純の從順の世の大智よも超越し純善  
 の良心は哲理よ通曉する喜びよりも大なり富を輕す  
 るの念の世の財寶よりも貴まれ熱心の祈禱の美食

に飽きしより慰藉を得ること多し多辨せんよりも静  
 黙の方尙喜ばしく許多の華言よりも潔行の利は多く  
 世の歡樂は謹直の生涯嚴烈の痛悔の快に及ばざるな  
 り  
 汝未來に於て劇しき苦痛より救はれんか爲め今僅少  
 の苦痛に堪へ忍ぶことを習ひ未來に於て堪へ得る力  
 を試みよ若し此世に於て僅少のことよりも堪へざれば  
 如何で克く彼の永久の苦痛に堪ふべけんや些々たる  
 世の艱苦の爲に其耐忍を失はば若し地獄の火に逢ふ  
 ときは果して如何ぞや此世に於て歡樂を擅にするこ  
 と未來に於て基督と俱に王となることの二者は併せ  
 得べからざるなり汝若し此瞬間に死せんよりは今日ま

で維持せし名譽と快樂は何の益する所あらんや  
 故に神を愛し惟之に仕事ツカフることの外は皆虚事なり誠  
 心より神を愛する者は其完き愛によりて惶懼ホウケなく神  
 に接することを得るが故に死も刑罰も裁判も地獄も  
 嘗て恐るることなきなり此に反し犯罪を甘ずるもの  
 死と裁判を怖るは實に異むるに足らざるなり若し  
 愛に由りて完く罪を離るることを得ざるも地獄を恐  
 るるの心より罪に遠ざかることを得ば豈善からずや  
 神を畏るることを忽ユルカセ諸する者は善事を爲すも永續  
 することなく速く悪魔の罟中に陥るべし

第二十五章

熱心を以て一生の言行を改悛す

事 (此章は特に修道者の爲に記する所なり)

(一) 警醒精意して神に仕事し又屢何の爲に世塵を拂ひて此修道院に來りしやと熟々考ふべし是實に生涯身を神に献げて靈に屬する人とやらんが爲にあらすや然らば則ち汝靈の上達に於て頗る熱心なるべし蓋し遠からずして汝の勤勞の報酬を受くべければなり彼の時到來ば汝の境界は最早恐懼と憂愁一もあることなし汝宜しく今少しく働苦すべし然らば大なる安息則ち無究の喜びを得べし汝若し間斷なく善をなさんとして信實熱心ならば神も亦汝に報ゆるに信實寛大なること固より疑ひあることなし汝勝利を得べき善き望は持べしと雖ども決て安堵すべからず恐らくは怠慢と驕傲に陥るの憂あらん

(二) 或人嘗て憂ありて恐怖と希望の中に漂ひ時として悲哀の迫る所となり忽ち禮拜堂に入り謙遜りて祭壇の前に跪き祈りて後ち心に思らく若し我終結まで忍び得るものありと知らば如何に幸ならんと於是乎直に心の中に神の答へを聞けり曰く汝之を知らば何を爲さんと欲する乎知りたる後ち爲さんと欲する所は今爲すべし然らば汝即ち安然あるを得んと是に依て慰められ強められて全く神の旨に委せられたれば其浮茫の憂慮も熄み後來の方向は如何ならんと徒らに其心意を勞するを廢止して諸の善業を始め之を成就せんには神の全く且喜び給ふ旨意は如何なるかを悟らん爲力を盡したりとぞ

預言者曰く主を望みて善を行へ此國に止まれ然らば  
其富に養れんと

多く人の善に進み熱心を以て過を改むるを阻害する  
ものは即ち難爲を恐るゝと惡と戰ふの勞苦是れなり  
然れども己の最も困難なること又反對なることに大  
丈夫の如く勝を得んと努むる者こそ他より優れて凡て  
の徳は最も能く進むことを得べし是れ人已に打克ち  
勞苦を以て己を制するにより能く上達することを得  
又大なる神恩を得べければなり然れども凡ての人其  
己より克ち且惡を死せしむるに於て各の量相等しから  
ずされど多くの情慾ある人も熱心努むる時は徳を進  
むる熱心なき温和の人に勝りて利を得ること多かる

べし

特に我等の行を矯正するを裨補するもの二あり即ち  
天性溺れ易き惡業より強ひて身を遠くすること及び資  
性特に欠く所の美德を熱心に求むる事是あり  
又他人の爲す所を見て常に不快を覺ゆる事ハ汝に於  
ても之を慎み之を除く事を勉むべし

汝何所に在るも己が靈魂を益すべきものは之を集攬  
せよ若し善き龜鑑を見聞する時は努めて之より摸倣せ  
んことを勵むべし又之に反して責むべき所を見れば  
汝避けて之を爲さざることを慎むべし而して若し之  
を行ひしことあらば速に其過誤を矯正することを勉  
むべし汝の眼常に人を觀察する如く汝も亦同じく他

の注視を受くべし  
 心を熱く且専らよし禮義ありて能く規律を遵守する  
 兄弟を見れば如何に快く且樂しき乎又放縱にして秩序  
 なく爲よ召されたる勤を爲さざる者を見れば如何よ悲  
 しく且憂ふべき乎夫れ其職務の善き志を棄てて命を  
 受けざる事よ傾向するは此れ實に有害なる事にあらずや

(三) 汝既よ立てたる志を覺て常よ汝の心の眼前に十字  
 架に釘けられたる基督を仰ぎ見るべし汝基督の言行  
 を見れば實に耻づべき事多かるべし汝永く神の道を  
 歩行アユども尙未だ基督を摸擬することを勤めざるが故  
 かり熱心を以て主の最も聖ある生涯の言行及び其苦

死を考慮する修道者は此に由りて多く己よ必要利益  
 あるものを見出し耶蘇の外他に善きものを探討タツするの  
 要なきを知らん嗚呼若し十字架に釘られ給ひし耶博  
 蘇我等の心に來り給はし我等は如何よ速く完全なる  
 學者となり得べきぞ  
 熱心なる修道者は已に命せられたるものを諾し凡て  
 よく之を負擔せり然れども輕忽冷淡なる者は多くの  
 苦難を有し全く苦痛を以て圍まるべし是れ内心の安  
 慰を欠ぎ又外部の快樂は之を求むることを禁せらる  
 うが故あり其規律を遵守せざる修道者は其靈魂滅亡  
 よ近く規律の寛裕を求むる者は常に煩悶の中に在る  
 べし蓋是れ種々の事に就て常に不快を覺ゆればなり



然るに嚴重の規律に繋がるに多くの他の修道者は如何ぞや彼等は外出すること稀にして静閑に在るを常とし其衣食の尤も麗にして勞働は非常に多く又發言すること僅かにして夙に起き夜半に寝ね永き祈禱を爲して止まず屢書を読み總ての規律を嚴格に遵守せり又他の修道院に在る兄弟姉妹の實況を見よ彼等は毎夕起ちて主の前に讚美をせり然れば此の如き多くの修道者の神の前に讚美を始むる時に至り汝獨此清き働きを怠るの耻づべきにあらずや

嗚呼我等は常に口と全心を以て主なる神を讚美するの外他の爲すべきものなければ喜ばしきものを嗚呼飲食睡眠を要せず常に神を讚美し惟靈の要務にのみ

身を盡すことを得ば善かりしならん若し斯の如くなることを得ば多く日用必需のためは肉體に使役せらるゝ今よりは一層の幸福なるべし嗚呼彼の身は必要の物なくして今唯稀に味ふ所の靈に属ける快樂のみを有せば無上の幸福あらん

人若し受造物より去て其樂を求むることなきに至らば全く神の恩惠を味ふことを始むべし其時に至れば如何あること起るも皆満足すべく其富饒に向ふも喜ばず又貧困に迫るも敢て悲まず眞實を以て全く神に委託し凡ての物の上に神を主たらしむべし神の前には亡ぶるものなく死するものなく唯凡ての物は神の爲に生き猶豫なく其指點に従ふあり

八哥前十五〇廿、  
二(路廿〇三八、  
黙四〇十一、

汝常<sup>ナ</sup>命終<sup>ハ</sup>を記臆し又既<sup>ナ</sup>徒消したる時日の飯り來らざることを思考せよ注意勉強なくして決して徳に達すること能はず汝若し冷淡ならんことを始むれば即ち惡たらんことを始むるなり然れども汝寔に熱心ならば大なる平和を得て神恩と徳を慕ふにより勞苦を感ずることを減少すべし熱心勉強なる人は凡ての事の準備を爲せり

惡習と情慾を拒ぐことは流汗して身體を勞働することよりは重き働きなり最も僅少なる過ちを除がざる者は漸次大なる過ちに陥るべし若し汝日中を利益<sup>ニ</sup>過さば夕に於て常<sup>ニ</sup>喜びあらん自らを守り自らを勵まし自らを戒めて他人の爲になす所あるも決して自

らを忽<sup>ニ</sup>諸<sup>カセ</sup>すべからず汝強ひて已を制すれば其量<sup>ニ</sup>從ひ倍靈の上達することあらん  
アーメン

## 緒言

本書はトマス、ア、ケンピス氏の著述に係る基督に倣ふ事と題する書を翻譯したるものにて則ち世範と題する書中第四の卷なり此卷に載する所は篤信の敬虔者が聖餐の恩典を受授するに於て最も有益なる事項のみなれば今譯者は特に之を抜粹して一小冊子となし以て購讀者の便宜に供せんとす故に其行文体裁等に至ては彼の第一第四の兩卷を合冊したる世範と別異あることなし若し夫れ讀者にして原著者の深旨を探り世範の全班を窺はんと欲せば宜し

合冊の世範に就て看るべし

明治廿五年八月

譯者識

### 世範卷之四

#### 目次

聖餐を受授するの要訓

第一章 基督を領るゝ大なる恭敬を以てす

べき事 (一)

第二章 聖餐に於て神の大なる慈愛の人間

に顯はるゝ事 (十二)

第三章 屢聖餐を領くれば最も益ある事 (十八)

第四章 敬信を以て聖餐を領くる者よは多

くの恵を賜ふ事 (二十二)

第五章 聖典サクラメントの尊き事並に會長プレジデントの地位 (二十八)

第六章 聖餐前の準備を尋る事 (三十一)

目次

- 第七章 内心を詳省し悔悛の志を定むる事 (三十二)
- 第八章 基督の十字架上の供物及び己を捨る事 (三十六)
- 第九章 我身と我所有とを神に捧げ又萬民の爲に神に祈るべき事 (三十八)
- 第十章 輕忽しく聖餐を廢すべからざる事 (四十二)
- 第十一章 基督の聖体と聖書は信仰ある靈魂に必用なる事 (四十八)
- 第十二章 聖餐よ與からんとする者は基督を領くる爲大に力を盡して其準備をなすべき事 (五十五)
- 第十三章 篤信家は全心を以て聖餐に於て基督に結ぶを願ふべき事 (五十九)

- 第十四章 基督の体を領けんとする篤信家の熱望 (六十三)
- 第十五章 熱愛の恩は謙遜と己を捨るによりて得らるる事 (六十五)
- 第十六章 己の望み需むる所を基督よ開陳し以て其恩を祈るべき事 (六十九)
- 第十七章 宜しく熱愛と切願を以て基督を領くべき事 (七十二)
- 第十八章 人は妄りよ聖典の事を議すべからず唯謙遜を以て基督に従ふものゝ如く己の感覺を信仰に服せしむべき事 (七十六)

約六〇五十六、  
 約六〇六十三、  
 〔太廿六〇廿六、  
 哥前十一〇廿四〕  
 太十一〇廿八、  
 約六〇五十一、  
 約六〇五十六、  
 約六〇六十三、  
 約六〇六十四、  
 約六〇六十五、  
 約六〇六十六、  
 約六〇六十七、  
 約六〇六十八、  
 約六〇六十九、  
 約六〇七十、  
 約六〇七十一、  
 約六〇七十二、  
 約六〇七十三、  
 約六〇七十四、  
 約六〇七十五、  
 約六〇七十六、  
 約六〇七十七、  
 約六〇七十八、  
 約六〇七十九、  
 約六〇八十、  
 約六〇八十一、  
 約六〇八十二、  
 約六〇八十三、  
 約六〇八十四、  
 約六〇八十五、  
 約六〇八十六、  
 約六〇八十七、  
 約六〇八十八、  
 約六〇八十九、  
 約六〇九十、  
 約六〇九十一、  
 約六〇九十二、  
 約六〇九十三、  
 約六〇九十四、  
 約六〇九十五、  
 約六〇九十六、  
 約六〇九十七、  
 約六〇九十八、  
 約六〇九十九、  
 約六〇百、

世範卷之四

聖餐と受授するの要訓

主曰く凡て勞れたる者又重きを負へる者の我に來れ我  
 汝等を息ません  
 我が與ふるパンは我が肉なり世の生命の爲よ我之を與  
 へん  
 取りて食せよ此は汝等の爲よ擘かるる我が體なり我を  
 記憶せんが爲よ之を行せよ  
 我が肉を食ひ我が血を飲む者の我よ居り我も亦かれに  
 居る  
 我汝等に言ひし語は靈あり生命なり  
 第一章 基督を領るに大なる恭敬を以てす

第一章 基督を領るに大なる恭敬を以てすべき事

べき事

(一) 永遠の眞理なる基督よ右に掲ぐる語は一時の説諭又一所に記したるものにあらざれども此皆主の云ひ給ひし所なり然れば此聖言は我必らず感謝と信實を以て皆之を領くべき事なり抑も此語は主の聖言よして主誠に之を發言し給へり且此は我が救ひの爲に云ひ給ひし所なれば亦我がものなり我喜んで此語を主の口より領け我が心中に種樹すべし蓋此語は最も甘き慈言よして仁愛の極なれば大に我を勵ませり然れども我罪大よして惶懼多く心汚穢なるが故よ斯の如き大なる奥義を領くるを得ざらしむ我主の甘言の爲に勸諭を受くれども罪重きが故に阻壓せらるるなり

太十一〇廿八、

若し主と關係あらんと欲せば必らず堅信を以て來り永遠の生命と榮光を得んと思へば不死の糧を領くべしと命じ給へり其語よ曰く凡て勞れたる者又重荷を負へる者は我よ來れ我汝等を息ませんと嗚呼主なる我神よ貧しく且賤しき者を招きて主の聖體の饗應に與らしむるの此言は誠に罪人の耳に如何に甘く且愛すべき哉

玉上八〇廿七、

夫れ我は如何なるものなれば主の前に至るべき乎見よ諸天の天すら主を容るるに堪へざるに主は却て我等を招きて曰く汝等凡て我に來れと主の大仁なる愛を施して以て我等を招けり其聖意果して如何ぞや我主の前よ進むる微少の善事あるも知らざるや如何で

輕しく主の前に近くべきや我已に多次我罪を以て主の慈顔に忤ひしものなれば如何で主を我陋室に接待ハカんや主の前マに在る天使と其長は主を恭敬レヤマひ聖徒と義人は皆之を敬畏せり然れど主は我等を招きて曰く汝等皆我に來れど主倚し親しく此聖言を出し給はざれば誰か此眞成なるを信せんや又是れ眞に主の命令にあらざれば誰う主の前マに進むを勉めんや夫の義人なる諾ノ尼ニすら庶人と俱ニに救はれんが爲に百年の永き工勞を積チで漸く其方舟を造れり然れば我暫時トよして如何でか妥當の恭敬を以て天地の造主なる眞神を迎ふべき準備をなすを得んや主の至愛なる大僕摩西モイセは朽ちざるの木を以て聖櫃を

創六〇三、

出廿五〇十、十六、

造り純金を以て其上を蔽ひ内ニに法律の二石板を藏めたり我は是れ朽壞の人なり如何でか輕しく律法の立ツ法者リ又生命の與へ主なる神を領くべきや又所羅門ソロモはイスラエルの諸王中に在て智者なり王ニの榮光を顯さんが爲に宏壯なる宮殿を造營して七年の星霜を費したり彼れ又其落成を祝せんが爲ニに八日の間奉堂の饗應を行ひ酬恩祭の爲め亘萬の犧牲を捧げ又大なる喜悅を以て音樂を奏し殿内ニに設けたる正しき位地に契約の聖櫃を安置せり我は是れ衆人の中に於て貧窶マツく且憐なるものなれば何ぞ敢て主を我が陋室に延請することを得んや我は片時も微虔に心を用ふること難し願くは一次たりとも其片時を正當

王上六〇三十八、

王上八〇六十二、  
六十六、



(二) 有益に費すことを得ば誠に幸福なり  
 噫我神よ此人は神の聖意に適合はんが爲に如何に  
 力を竭し勉めしや嗚呼何ぞ其れ我が行爲は脆弱き手  
 嗚呼何ぞ其れ我が主を傾くるの準備は短き乎我は全  
 く我が心を收むること少く又全く世の繫累を免かる  
 ること希なり我が心の中は宿すべきものは天使にあ  
 らずして諸の天使の主なれば實に救ひを與ふる主の  
 前には惡念邪情を以て侵すべからず又造られたるも  
 のも漫に入るべからず  
 夫れ諸聖品を藏めたる契約の聖櫃と妙なる聖櫃を備  
 へたる主の聖體とを比せば其差果して幾許ぞや又將  
 來の模倣なる律法上の犠牲と古の犠牲を全ふせし主

(三) 夫れ熱心の敬虔者ダビデ王は神の其先祖に恩恵を加  
 へ給ひたるを憶ひ起し神の聖櫃の前は在りて力を極  
 めて欣舞踴躍し且幾多の樂器を造り詩篇を著し伶人  
 を設けて之を喜び謠ふことを示命し又聖靈の恩和に  
 充たされて自ら琴瑟を弾じて屢謠ひ或はイスラエル  
 人を教へて毎に全き心を以て神を稱賛し朗らなる  
 の聖體の眞成なる犠牲と相較れば亦其差幾何あるや  
 知るべからず我は何故に最も貴き主の前は在りて燎  
 の如き熱き心を發せざるか彼の諸列祖豫言者國君及  
 び衆民皆克く敬虔の心を發して主に奉仕ふるに我は  
 蓋ぞ聖餐を傾くるに一層大なる恭敬の心を起して其  
 準備を爲さざる乎

韻聲を發して日々感謝讚美を爲さしめたり其時契約の聖櫃の前よ在るもの皆大なる愛を發して神の恩恵を記憶して讚美稱へたりされば今我と基督を信する者は聖典（サクリメント）の式場に於て基督の聖体を領くるよ當り如何に熱愛尊敬の心を持つべき乎

(四) 人多く遠地よ往き聖徒の留むる蹟を敬視し其行爲を駭き聞き又仰ひで廣大なる殿堂を視又恭しく錦繡の囊中よ就て聖骨に親吻（クシツケ）す况んや我が神は聖の聖、人類の造り主及び諸天使の主よして親しく聖臺よ臨御して我と共に在すをや

夫れ人の外よ出て聖徒の蹟を視るは唯其奇古を見異聞を聽て其耳目を樂ましむるに過ずして言行を正し

くするの益よ至て尠し殊よ罪を悔ゆるの心あくして諸所に浮遊する時は更に其身を益することなし然るよ聖臺に在る聖餐よは我神にして人ある基督耶穌の現存し給へば我よ恭敬しく之を領くる毎よ永遠の救ひに拘はる好果を豊かに領くることを得べし抑此を領くるは徒らよ浮薄よ流れ見聞を好み又情慾の誘ひよ従ふよあらず則ち實に堅き信仰熱き冀望誠の愛心に因るなり

(五) 噫見るべうらざる天地の造り主なる神よ主の我等を遇し給ふ所何ぞ其妙なるや主は簡びし者を恵み自ら其聖体を與へて我等の糧となせり何ぞ其れ厚く且甘き乎此の大なる恩遇は人智の及ばざる所にして最も

敬虔者の心を誘引し又其愛情を匿起すべし如何となれば誠實を以て一生の言行を改悛することを勤むる忠信なる主の僕は此最も尊き聖餐を領くれば則ち屢熱心なる敬虔に進み又徳義を愛する心を稟け諸の善よ向ふに至るべし

(六) 嗚呼秘隱なる聖典の恩恵實に妙なり惟基督に忠信ある者は之を知覺すされども信なき者又罪の下僕とある者は之を味ふことを得ざるなり夫れ此聖典は靈魂上の恩恵を興へられ既に失ひたる靈の力を復し又罪によりて汚濁れたる美を復歸することを得べし又此恩は時として廣大あるが故に之に依る熱愛に充たされて心のみならず其弱き体軀も亦大に力量加はるこ

とあるを覺ねん

(七) 惟愛ふべき哉憐むべき哉人の心冷淡にして怠惰多く基督を領くるお熱心あらざること蓋救はるゝ者の完全き希望と其功は主基督よより主は自ら聖の源となり我等の贖ひとあり又此世は旅客たるものゝ慰め聖徒の永遠き幸福となり給へばなり又此恩の奥義は救の源にして天の喜ぶ所全世界を保有するものなるに人多く茲に注意せざるは誠に愛ふべきの至りならずや

噫人心の暗昧頑硬なること此恩の妙を感せず又常よ其恩を受くるに慣れ其妙の深きを思はざるは誠に恠むべきなり若し世間唯一の所よのみ此至聖なる聖典

を行ひ一の會長プレズラロのみ之を聖成するものならば人々必らず大なる熱心を以て其地に到り又會長を慕ひて其奥義の執行を見聞せんことを希ふべし然れども今や幸に許多の會長あり基督の犠牲を捧ぐる所數多ありて此聖なる交接の全世界に普及し従て神の恩恵を與ふることも又人を愛し給ふことも益大に顯はるゝなり永遠に在す善き牧者なる主耶穌に感謝す主の其愛に因り聖なる体と血を以て我等の如き貧困流竄なる者を補養し此聖典を與んが爲め自ら聖言を發し我等を招きて曰く汝等凡て勞れたる者又重荷を負へる者は我に來れ我汝等を息ませんと

第二章 聖餐に於て神の大なる慈愛の人間

顯はるゝ事

(一) 主よ我主の大なる愛憐を待みて主の前に到れり即ち憐れある病者とならば救主に往き飢渴者とならば生命の泉より行き究迫者とならば天國の王に到り下僕は其主に到り造られたる者の其造主より行き愁ふる者は慈悲深き慰主より行くなり  
夫れ主は何に由て我に來臨キマする乎我何人あらば主は自らを我より賜ふや罪人如何で主の前に出でんや主も亦何を肯て罪人より來臨キマんや惟主は能く僕の心を洞見し此恩を與ふべき些少の善なきをも知り給へり  
我は自ら至賤なるを言ひ顯はし主の至慈あるを認む我は惟主の仁恵を讚美し又主の愛究なきにより主に

感謝せり蓋し主の此恩を加へ給ふハ我微力よよるに  
 あらず主の榮光の爲なり是れ主の恩恵を猶明らうに  
 我に顯はし尙深く愛を我に施し又主の謙讓を完全に  
 示さんが爲あり既主の聖意に適ひ亦主之を命令し  
 給ひしが故に我喜びて此恩を領けんとす願くは我罪  
 此阻碍とあらざらんことを  
 柔和にして最と仁惠深き耶蘇よ主の聖なる体を領く  
 る時の如何なる恭敬を以て感謝し又絶えず之を讚美  
 すべき乎其奥義の貴くして妙なること誰か言語を以  
 て云ひ盡すべきや然れども我が主よ近寄り我主よ交  
 接するに至ては如何ある思考を以てすべき乎我正し  
 く之を尊敬し能はざるも恭しく之を受け容るゝを願

口詩七十八〇廿五、  
 ハ約六〇三十三、

ふなり噫有益なる考案と善き思慮は他ならず只自ら  
 主の前に謙遜し且我上に無究カキリナき主の恩恵を奉揚すべ  
 し我神よ我は永遠に主を稱讚し我身を蔑如し而して  
 其卑下なるに感じて主の前に拜伏せん  
 主の誠に聖の聖なるものなり我は誠よ罪人中の汚穢  
 物あり我は仰ひて主に向ふよ足らざれども主は自ら  
 我に臨み給ふ主は誠に我よ來臨キタり我と俱に在すを好  
 み饗應の席に我を招きて天の糧を與へ天使の食を喰  
 ましめ給ふ是れ天より降りて生命を世に與ふる生る  
 パンにして即ち主あり  
 見よ此愛は何所より出る乎此憐恤の光輝は如何に耀  
 くか此が爲に主に歸すべき感謝讚美は將た幾許ぞや

詩百十八〇五

夫れ此聖典を設け給ひし主の聖意は有益にして又救ひを與へ給ふなり主は已を以て我食となし給ふ此饗應の誠に美哉甘哉主よ主の所爲誠に妙なる哉主の能力誠に大なる哉主の眞實の言ひ盡し難き哉主一度聖言を降し給へば萬物成な成れり且今主の命じ給ひし事も亦己よ成れり主なる神よ主は眞の神眞の人にして僅少のパンと酒中に入り人の爲よ匿ざる飲食物と爲り給へり是れ誠に人智の及ばざる奧義よして最も信すべき所なり

夫れ主は萬物の主宰にして物に乏しき事なきも此聖典よよりて我等の心中よ泊り寄らんとし給へり願くは我が心と體を清潔よ保ち給ひて我をして喜ばしく

且清き心を以て主の榮光と永遠の紀念の爲に聖成して立て給ひし此奧義を屢執行せしめ且拜受せしめて永遠の拯救よ與らしめ給へ

(二) 我靈魂よ喜べ斯の如き尊き賜物又非常なる慰藉を此泣涕の谷に遺し給ふ神に感謝せよ汝此奧義を回想し基督の聖體を領くる毎に主の贖罪の聖業抄取り汝も亦基督の総ての功績に與うる者となるなり夫れ基督の愛は常に減することなく贖ひの大なる功績も亦共に竭きざるなり

汝宜しく日々に心を新にし之を領けんが爲に其準備を怠らずして専ら拯救の奧義を懇到追憶すべし此に因りて此聖典の受授ある毎に恰も基督は其日初めて

降りて處女の胎内に宿りて人となり給ひ或は其日十字架に釘り人間の救ひの爲よ苦を受けて死し給ひし如く其恩の大なる事新らしき事喜ばしき事を感ずべきなり

第三章 屢聖餐を領くれば最も益ある事

(一) 主よ我主の前に到り主の賜物によりて益を受け神の恵を以て貧者の爲に供へ給ひし此聖なる饗應を受けて喜びを得んと欲す凡て我望む所願ふべき所惟是れ主よ在り主は我拯救、贖罪、希望、勇氣、美譽、榮光なり故に今主よ願ふ主なる耶蘇よ我は主を仰ぎ望めば僕の靈魂を悦ばせ給へ我は熱心と恭敬とを以て主を領くるを願ひ主を我室に請け又ザアカリと共に主に祝

イ詩八〇十一、

詩八十六〇四、

公路十九〇九、

せられアブラハムの子よ數へらるゝ恵を受けんと欲せり我靈魂は主の聖体を欣慕し我心は偏に主に結ばんことを願ふなり願くは已を我に與へ給へ然らば我足れり是主の外我を慰むるものなければなり主若し在さざれば我は存在すること能はず故に我屢主の前に臨まざれば我活動すること能はず故に我屢主の前に至り我靈魂の救ひの爲に主の聖体を領けざれば天の糧を奪れて途に憊れ困まん憐みある耶蘇よ主は曾て教を人に説き又諸の病を愈せし時言ひ給ひし事あり我彼等を飢させて去らしむるを欲せず恐らくは途上よて惱まんとされば斯の如く我をも待ち給へ蓋は此聖典よ於て信仰ある者を慰めんが爲に已を遣し給

ニ太五〇三十二、

へばなり夫れ主は靈魂の美なる糧なり主を正しく食すれば主の永遠の榮光を受け嗣ぐものとなるべし然れば則ち我の屢迷ひ屢罪を犯し速に冷淡となり又倦み勞るゝ者なれば必らず屢祈禱と懺悔を志し主の聖体を領くるゝ依りて己の心を新にし淨く且熱くすべきなり恐らくは久濶く之を受領されば我清潔なる志を變せん夫れ人の心の圖維る所其幼少の時より惡しければ聖藥を以て之を補助せざれば愈惡に陥らん故に主は即ち聖餐の恩により人を挽て惡よ入れず強めて善よ進ましめ給へり今我聖餐を領け又其聖ある式を行ふも尙且怠惰と冷淡に陥るを免がれざれば若し此聖藥を領けず又此大ある佑けを求めざる時は我

ホ創八〇廿一、

へ哥后五〇六、

身は將さに如何にふるべき乎我假令日々之を受授するゝ充分の準備をなし得ざるも但相當の時に於て心を留めて此聖典と與り主の大なる恩を分領せんことを勤むべし蓋し信仰ある靈魂主より離れて此死すべき体と在る間此聖典は即ち特慰の一にして屢其神を記憶し又熱心を以て敬愛する主を領けしむるものなればあり

(二) 主の我等に對する仁慈と謙遜は實に妙なる哉總ての靈魂の造り主活し主なる神よ主は我を棄てずして貧者の靈魂と降り充ちたる神人の性を以て我等が餒を充飽しめ給ふ我が主なる神よ熱心を以て主を領くるものとなり之



を領くるによりて靈魂の喜びも充滿ミさるゝことを得ば其心の如何に幸福にして喜ばしき哉夫れ此の如き心は如何又大ある主人を延く乎如何に敬愛すべき客を迎ふるや如何に樂しき伴侶を受くるや如何に忠信なる友を受くる乎如何に尊美なる新郎を抱く乎實に總て親愛する者に優り且都て欲望する物に勝れて愛すべきものなり

最と愛すべき主よ天地と其間に在る總ての粧飾の皆黙すべし是れ其美麗と稱揚ホべきものハ皆主の與へ給ふ惠あれば物一として主の聖名の榮光に及ぶものなし蓋し主の全智は量りなく限りなければなり

第四章 敬信を以て聖餐を領くる者には多

ト詩百六十七〇五、

ト詩百六十三、

ト詩百六〇四、

くの惠を賜ふ事

(一) 我神なる主よ主の慈愛の賜物を以て主の僕を迎へ熱心を以て正しく主の尊き聖典よ近付くことを得させ給へ

願くは我心を起し主を慕ひしめ頑懦を撤去し且主の救ひよより我に來臨し渴かざる泉の如き聖餐の中よ豊かよ含める甘味を我靈魂に味ふことを得させ給へ願くは我眼を明らうにして此大なる奧義を見せしめ之を信する爲堅き信仰を與へて我を強め給へ是れ主の所爲シとして人の力にあらず又此れ主の聖ある定めよして人の發明する所よあらざるなり故に天使の智能すら測り得る所にあらず況んや人の智慮深きも如

第四章 敬信を以て聖餐を領くる者には多くの惠を賜ふ事 二十三

何で自らの力を以て其妙なるを悟り得べけんや我は  
 功なき罪人よして又塵の如く灰の如き身なりされば  
 如何にして此貴重なる聖典を探り究むることを得ん  
 や主よ我は質朴と堅信の心を維持し主の命令を奉じ  
 冀望と恭敬を以て主の前よ來れり主の眞の神眞の人  
 よして全く此聖餐の中に在まし給ふことを我は確く  
 信するなり

夫れ主の望み給ふ所は我をして主を領け又切愛を以  
 て主と一体ならまめ給ふこと是れあり故に我主の憐  
 みを乞ひて特別ある恩恵を與へ我をして主に對する  
 愛に溢れしめ又主の外他に慰藉を求むることあから  
 しめ給はんことを願ふ是れ最も大よして且尊き聖餐

は身体と靈魂の救ひとなり又精神怠惰の藥となり我  
 惡事を愈し我邪なる情慾を止め之に因て諸の誘惑來  
 ること少くして勝を得ること多く又更よ聖恩を増し  
 徳力を加へ信仰を堅くし冀望を確よし愛情を炎の如  
 く熾ます

八詩五十四〇、四

(二) 我神よ主の我靈魂を保護し人間の荏弱を補ひ永遠の  
 慰を與へ給ふの主ありされば熱心を以て聖餐を受領  
 る主の愛し給ふものにて曾て多くの恩を與へ今も尙  
 屢之を與へ給へり主は多くの苦惱を受くるものよは  
 大なる慰を與へ失望の究谷より救ひ上げて主の保護  
 を望ましめ新なる恩を以て其心中を強照し慰を加へ  
 給へり仍て聖餐よ與らざる前憂鬱多く愛情少き者も

此の天の糧と飲料に養れて忽ち善よ進むことを覺ゆべし。主の此の如く簡びし者を待遇ひ給ふが故よ彼等は誠よ己の貧虚しきことを覺り現よ主より出る慈愛を知るよ至らん蓋は彼等ハ自ら頑硬冷淡なるものなれども只主に便りて熱心と愉快と恭敬とに充たさるるを得ればなり。誰か謙りて甘き泉に近き其幾分かの甘きを携へ歸らざらんや誰か燃ゆる火の前に立ちて多少の熱を受けざらんや況んや主は常に満ち溢るる泉水燃ゆる熾さるる烈火なるをや我假令溢るる泉に近付くことを得ず又十分之を飲むことを許されざるも我心の全く渴か

ニ利六〇十三、

ざる中に天の管の下よ到りて唇を接し其一滴だも嘗め得て之を沾さんとす又假令ケルビム及びセルビムモト井の如く天に在て愛の炎熾なるを得ざるも我れ力を奮ひて準備をなし謙遜を以て生命の基礎なる聖餐を領け天の烈しき火の熾炎だも求めんと思ふなり。至聖なる救主よえて仁恵ある耶蘇よ我に欠けたる所あらば大なる恵を以て之を補ひ給へ夫れ主は凡ての人を其聖座に招きて曰く汝等凡て勞れたる者又重荷を負へる者は我よ來れ我汝等を息ませんと我顔に汗して勞働ハダクき心機ココロの痛みに因て罪の重荷に勞れ誘惑の爲に悲しみ多くの惡慾の中よ迫られ縛らるれども我を助くる者なし我を愈し救ふ者外にあらず惟主ある

ホ創三〇十九、

のみ臆救主なる神よ已と総て己の物を主よ委託せ我を保護り永遠の生命に至るまで導き給はんことを願ふ主は聖体と聖血を我飲食に供し給ひたれば聖名の譽と尊榮を顯はさんが爲よ我を受け入れ給へ我救主我神なる主よ屢主の奥義を領くるによりて益我熱心と愛情を熾盛ならしめ給へ

第五章 聖典の尊き事并に會長の地位

(一) 汝假令天使の清潔と洗禮の聖約翰の聖とを持つも此聖典を受授するには足らざるなり夫れ人にして基督の聖餐を祝し天使の糧を己がものとなすは人間の功力の及ばざる所あり大なる哉此聖典重き哉會長の職掌主は天使に許さるるものを人に授け給ふ故に聖公

イ詩七十八〇廿五、

會に於て正しく任せられたる會長に限り基督の体を祝して聖成するの權威を有せりされば此會長は即ち神の仕人として神の言語を用ひ神の命令と其定めに従ふなり然れども神は彼所に在りて総ての主宰となり又見ゆる所の行爲をなし給ふ故に總てのものに其聖旨に歸し其命令に服従せざるを許さざれば此尊き聖典に就ては自らの感覺に依ることなく見ゆる標に依頼することなく却て全能の神を信じ恐懼と恭敬とを以て之を行ふことを始むべし

(二) 是故に監督の按手によりて汝に委託せられたる職務は誰の命なるやと謹みて考ふべし見よ汝任せられて會長となり此聖典を祝する爲に聖別せられたり然れ

ば汝神の定め給ふ時に當り信實と恭敬とを以て供物を捧げ又罪科なき者の如く已を顯はさんことを務むべし此れ汝の負擔を減せられたるよあらずして卻て猶狭き規律の鎖を以て己を縛り完全き聖善を目的とすべきなり抑會長たるものは宜しく諸の徳義を備へ他人の爲よ言行の善き模範とあるべし又其交際は一一般世俗の常道によらず天に在る天使及び地に在る充全なる善人と共に交はるべきなり

夫れ會長の聖衣を着け基督に代りて已の爲又民の爲謙遜りて恭しく神の恵を求むべし聖衣の前後にある十字架の標章は主の苦惱を思ひ起さんが爲にして其前にあるものは主の行ひ給ひし蹟を見て熱心之に従

はん爲あり又後よあるものは他より害を加へらるゝも忍びて之を受けんが爲なり且夫れ前よある十字架は已の罪を悔む爲よして其後にあるは人の罪を憐み人の過ちを悲み神と罪人の媒介者とせられしことを覺ゆんが爲なり故に神の恵を受くるまで絶えず祈禱と聖なる供物を捧ぐることを怠るべからず會長此聖典を祝する時よ神に榮譽を歸し天使を歡ばしめ公會の徳を建て生くる者を佑け死したる者に安息を求め己の爲よ諸の善を領るあり

### 第六章 聖餐前の準備を尋る事

(一) 主よ我主の至尊あることよ我至賤なることを思ひ至るときは則ち自ら戰慄<sup>カ</sup>且慚愧<sup>ゾ</sup>るなり若し我が主の

前に到らざれば自ら生命の源を離る又宜しきに適はず強ひて主に近付けば恐らくは輕慢の罪を犯さん我神よ主は我を助け頼みあきの際に我よ教を示し給ふものなれば我今如何になすべきや願くは主よ正しき路を我に示し聖餐を領くるよ方り相當なる短き準備を我に命じ給へ我は謹て此聖典を領け此最も大なる神の供物を祝する爲に熱心と恭敬を以て自身の準備をなすの方法を知るは大に我が益となるなり

第七章 内心を詳省し悔悛の志を定むる事

(一) 主曰く神よ仕ふる會長は第一聖餐を祝し之を受授するに至らば心を充分に謙遜し恭しく祈り信仰を完ふ

し只管神よ榮譽を歸することを志すべし故に詳かよ已が心を省み力を竭して確實に悔い痛み又謙遜<sup>ハッダ</sup>りて罪を懺悔し以て之を洗淨し主の前に至る時阻碍となるべき心の累を停むべからず汝総ての罪を痛恨し殊よ日々犯したる過ちを泣き悲み若し時あらば宜しく神の前に於て已が情慾によりて起りし苦難を心の中に懺悔すべし嗚呼汝自ら悲痛すべき事甚多きよあらずや汝今尙肉に屬し世塵よ纏はれ情慾を歴へず惡慾に充ち五官の妄働を謹ます虚説に惑ひ外相よ荒み内心の修整を怠り輕しく笑ひ戯れて悲み悔むこと遅く急よ寛よ趨りて身の安樂を事とし嚴格を守らず熱心を起すこと緩く新奇を聞き華美を見るを

好み賤業を爲すを厭ひ食りて多くの物を持たんとす  
れども施すことを吝み却て堅く貯藏せんとし言語を  
謹まず口を緘ること難く禮節正しからず事を爲すよ  
劇忙し飲食を節せず聖訓を聞くことを喜ばず安息に  
疾くして業に就くこと遅く雑談を聞く時は醒め祈禱  
を爲す時は眠り祈禱の終りを急ぎ心外に放逸して祈  
禱の意を留めず常禱の課程を怠り聖餐を祝するも熱  
心薄く之を傾くも潤なく心外に在りて内常に平垣マヒラ  
うなること少なく俄う怒りを發し易く人に逆ふこ  
とを慎まず輕しく人を判し嚴しく人を責め利を見れ  
ば喜び苦逆の域に遇へば落膽し多くの善志を立るも  
之を成し遂ぐることに少あし

凡そ此等其他の愆りを認めて悲痛し我身の弱きを歎  
きて懺悔し悲みたる後其言行を改め又善き道に進む  
志を堅く立つべし  
又宜しく萬事を神に委せ心を定めて我名の譽の爲し  
己を永遠の犠牲として汝が心の祭壇の上に捧げ正し  
く神は供物を奉り又宜しきも適ひて我体の聖典を領  
くることを得んが爲に信實を以て己の体と魂を我に  
委托ぬべし

(二) 蓋し聖餐禮の交接の時我体を供ふると共に純全よ已  
を捧ぐるより貴き供物はあらず即ち罪を消す善き方  
法の之に優るものなきなり人若し罪の宥免ユヰしと恵を  
得んと欲して我に來る毎に力を盡し眞實よ其罪を悔

ゆれば我の活く我悪人の死するを好まず寧ろ彼が其道を離れて活んことを喜ぶなり我は彼の罪を記せず却て悉く之を免さん

第八章 基督の十字架上の供物及び己を捨

る事

(一) 主曰く我十字架の上に於て両手を開展し総身を裸にし汝の罪を贖ひ神の怒りを宥めんが爲に心身を擧げて全く父なる神に捧げたり故に汝も亦毎日聖餐を領くるときは己の全き力と愛情とを以て淨き供物となし熱心我に捧ぐべし  
我汝を求むる所のものは他ならず只汝全く己を我に委託せんと務むるの一事なり汝の一心の外何物あり

とも我に用なし我欲むる所のものは汝の所有にあらずして只汝の心よあるなり汝若し種々の美麗しきものを得るも我を得ざれば足ることなし汝又種々のものを我に捧ぐるも己の心を捧げざれば我心足ることなし汝己を以て我に捧げ且汝全き心を以て神に捧ぐれば汝の捧げものを受けらるべし我汝を救はんが爲全く我を以て聖父に捧げ又我全き体と血とを以て汝の飲食物となせり是れ我汝のものとなり汝をして永遠無究に我ものとしめんが爲なり然れども汝自ら其身を擅にして完く捧げて我心に委託せざれば汝の捧ぐる所未だ全きものよあらずして我全く汝と相合はざるあり



故に汝自由と恩恵とを得んと欲せば總ての所爲の前  
に汝を神の手に捧ぐべし夫れ光を得心の自由を得る  
者少きは全く已を捨ることを知らざるに由てなり  
我曾て堅く矢へり人若し其所有を悉く棄てざれば我  
弟子とあることを得ずと故に汝我弟子となることを  
願はば已の諸情と共に己を我に捧ぐべし

第九章 我身と我所有とを神に捧げ又萬民

の爲に神に祈るべき事

(一) 主よ天地の間を在る總ての物は皆主の物なり然れば  
我も亦喜んで我身を以て皆主に捧げ永く主の物とな  
さんことを願ふ主よ我心を專らして主よ仕へ永く主  
の僕とあり永遠なき主の榮光を讃むるの供物と爲さ

ん爲我を主に捧ぐ主よ已の爲又主の凡ての民の救ひ  
の爲に今日見ゆすして列れる天使の前に主よ捧ぐる  
其尊き体の聖なる供物と共に我を受け給へ

(二) 主よ主と天使の前に於て罪を犯すことの始まりし日  
より今に至るまで犯し來れる罪科は總て主の贖ひの  
祭壇の上よ捧ぐ願くは主の愛の烈火にて焚き滅し又  
我罪の蠹痕を消し總ての汚穢を去り又我心を罪科よ  
り淨め嘗て罪によりて失ひたる恩恵を復び與へ給へ  
又願くは全く前の罪を赦し平安の接吻を以て我を憐  
恤て受けさせ給へ  
主よ我の何を爲して罪の赦しを蒙るべきや唯謙遜り  
て哭き悲み罪を懺悔し主の仲保を願ふのみ主よ慈愛

を以て我望を聞き給へ我は神の前に立て願ふなり我は深く前犯の諸罪を哀ひ再び之を犯さざらんことを願ふ却て其爲に今悲み又命あらん限り悲まん然れば我今心を定めて悔い改め必らず力を盡して其害を償ふべし我神よ我を免し給へ主の聖名の爲に全く我罪を免し貴き血を以て購ひ給ひし我靈魂を救ひ給へ我主の恩恵を頼み全く主の手に己を捧げん願くは主の慈愛よよりて我を容れ敢て我罪を以て我を待つことなかれ

(三) 我善事少く且不完全なりと雖も悉く主に捧げ奉る願くは之を清潔にし聖意に適應ふものとあし常に善に進ませ且怠慢無益の微者なる我を導き幸福ある終結

を得させ給へ

(四) 熱心者の善き望と凡て我愛する者父母親友兄弟姉妹及び主を愛するよ依りて我或は他人に善を施し者我に頼みて己と己の愛する者の爲に祈禱と聖典を捧ぐることを願ひし生存者死亡者の必需の願意を主に捧げ奉る願くは主よ彼等をして主の恩恵に助けられ主の慰よ富され危険より保護られ憂苦の中より救われ又総ての兇惡の中より免され欣喜を以て主の榮光を顯はす讚美と感謝を誦はせ給へ

(五) 主よ又我に仇敵し我を悲痛ませ我を誣ひ我を傷害ひし者我亦言と行とを以て故意若くは誤りて悲痛困苦せしめ又傷害せし者の爲に祈禱と供物を捧げ奉る願

くは我等の罪と相互に害ふことを免し我等の心より  
 総ての狐疑、隙患、憤怒、闘争及び心魂を害ひ兄弟の親和  
 を滅することを除却し給へ主よ憐みを願ふ者を憐み  
 乏しき者よ恵を與へ我等をして主の恵を豊かに受け  
 無究き生命よ至るべき者となさしめ給へ

第十章 輕忽しく聖餐を廢すべからざる事

(一) 主曰く汝常に仁寵憐恤の活泉即ち美善潔徳の本源に  
 至り以て私慾の害を癒し邪惡の根莖を抜き去り心の  
 睡眠を醒し且力を増し悪魔の諸の誘惑に敵し其手計  
 を破るべし

蓋し大仇は聖餐の中よ含める多くの利益と善法を知  
 る故に種々の謀計を用ひて延き阻み忠實熱心なる人

の聖餐を領くるを妨ぐべし如何とあれば人よ聖餐を  
 領くるの準備を爲すの時よ當り非常よ悪魔の誘惑を  
 受くべし約百記よ載する如く彼の惡しき靈は時よ神  
 の子の中に入り己の邪を以て其心を攪乱して驚畏疑  
 惑せしめ又愛心を滅却し信仰を攻めて之を打破り遂  
 に冷淡なる心を以て聖餐よ近付らしむる若しくは  
 全く之を受くることを阻碍ん

然れども悪魔の運す計りごと又心に起さしむる邪念  
 は如何に汚穢至卑ある者と雖も決して願ふことな  
 く卻て之を取て彼が頭上よ抛げ反すべし彼假令如何  
 に攻來りて攪乱せんと計るも汝之を笑侮し必らず貴  
 き聖餐を領くるを廢すること勿れ

又屢已熱心の足らざるを慮り又懺悔充分ならざるを疑懼して心緒紛々自ら碍ることあらん此時汝智者の勸諭に従ひ神の恵を妨害し心の恭敬を減ずる煩慮を釋き去るべし

聖餐は些少の紛擾と勞苦とによりて廢すべからず宜しく速に罪を懺悔し又罪を汝に得たるものあらば喜んで之を赦すべし若し又已罪を人よ得たることあらば謙遜して赦免を乞ふべし然らば則ち神も亦汝を赦し給はん

(二) 罪の懺悔を怠り聖餐を領くるを遅緩せば果して何の益あらん乎汝急に其心を清淨よし内に存する惡毒を吐出し速に良藥を受くべし然らば遅緩するより却て

快うらん倘し今日些少の阻碍ありて之を領けざれば明日は猶一層大なる阻碍來るや知るべからず此の如くして久しく聖餐を領くることを妨げられ又其準備を調ふことも益難かるべし故に速よ力を用ひて汝の憂慮倦怠の心を振起すべし若し然らずして久しく憂慮し且顛沛し日々の阻碍によりて神の奧義に遠ざからば益なかるべし又聖餐を遅緩せば心の倦怠益増長して其害も亦大ならん

心冷淡よして放逸なる人は喜んで懺悔を怠り聖餐を遅緩するを望む是れ則ち自ら我身を省るを厭ふに由てなり悲むべき哉嗚呼輕しく聖餐を領くるを遅緩する者の愛心如何に荏弱く其敬虔如何に薄きや

平生の行ひを正しくし本心を清潔に保ち若し人の怪しみを免かれ且許さるゝことあらば日々快く十分に聖餐を領くるの準備を調ふものは如何に幸福にして神に歡ばるゝものあらすや  
 謙遜の爲或は眞の阻碍の爲時として聖餐を領けざるは是れ則ち恭敬の至にして稱賛すべきことたり然るに倘し心よ倦怠を生ずることあらば力を盡して憤起すべし主は必らず其志を顧み其希望を満足せしめ給はん或は又眞に阻碍ありて聖餐を領くることを得ざるも正しき心ありて其望を保たば假令之を實領せざるも其益なしとせざるなり凡そ信仰深き人は毎日毎時阻碍なくして主に接近し靈魂を以て聖餐を領くる

が如く基督と交はることを得べし然れども定日定時よ恭敬と愛情を加へ此聖餐を以て贖ひ主の体を領け已の慰を求むるより却て神の譽の榮光を顯はすことを務むべし蓋は主の人となり給ひしこと其苦死とを想ひ基督を愛するの情を起す毎に其靈魂は聖餐を領くると等しく見ゆる糧に養はるべければなり  
 祝日の近きたるが爲或ハ風習の爲に壓せられてのみ聖餐の準備を爲すものは屢整はざる所あるべし  
 聖餐を受授する時は已の身を以て燔祭とし主よ捧ぐるものは幸福なり  
 凡て聖餐は宜しく其緩急を計りて行ひ汝と共に住むもの善良なる定規を準となすべし又聖餐を授くる

の時人をして倦厭せしめざるを謹むべし是故に通常の方法を用ひ又先人の定むる所は従ひ己の熱心愛情を満足せしむるより寧ろ他人の益を計らざるべからず

第十一章 基督の聖体と聖書は信仰ある靈

魂に必用なる事

(一) 憐みある主ある耶蘇よ信仰深き靈魂は主と共に主の設け給ひし饗應に與る此樂み如何ばかりぞや此饗應に與りて食すべきものは他ならず即ち愛すべきの主なり故に其甘美こと心の望外に在り我主の前に於て能く愛情を發して涙を流し彼のマグダラのマリアの如く涙を以て主の足を洗ふことを得ば眞に喜ばしき

イ路七〇三十八

ことあるべしされど我今此大なる愛情何所にあるや又清き涙の溢流は何所にあるや

主と主の聖なる天使の前は於て我心火の如く燃ゆ我心歡び極て涙を流すべし蓋し主は他の像を仮て隠れ給へども眞に聖餐の中は在し給へり主若し其固有の光を顯はし給はば我眼眩むべく世界も亦榮光の輝に射られて其前より立つこと能はず主の聖餐の中は藏れ給ふは我弱きを憐み給ふよりなり然れども天使の天に在て拜するものへ我も亦拜することを得べし惟我は此世に在りて信仰の眼を以て拜し天使は帽子の隔てなくして明らかに拜するのみあり依て我は永遠の光の日出で世の像影消ゆるの時まで

一〇六

二〇七

二哥前十三〇十、  
ホ哥后三〇十八、  
ヘ約壹一〇一、  
ト彼前二〇廿五、  
テ約一〇十四、

眞實の信仰の光りを足れりとして歩行べし夫れ全きもの來る時は聖典の功用止まん蓋は天國の光に於て幸なるものよは聖典の藥石は用なきが故なり此時に至りて聖徒は神の前に於て限りなく喜び聖顔を拜して其榮光を見又榮光よ榮光の彌増て推量るべうらざる神の像に化りて始より在まし永遠く在す者即ち嘗て肉体となり給ひし神の道を味ふことを得べし此の如き靈妙を感じる時靈魂に如何ある他の慰めありども必らず厭ふて慕はざるなり蓋し明々に我主を其榮光の中よ見ざる間ハ此世に於て我見聞することハ只虚しきものと思ふが故なり神は我爲に証明を爲し給ふ如く限りなく我拜せんと思ふ我神の外我を慰

リ 〔乘六〇十二、  
多二〇十三、

又哥后五〇七、

め我を安んずるもの一もあることなしされど我尙此朽果へき世にあれば此幸福を享ることを得ず故に能く忍耐して我願ふ所は皆主の命に従ふべし如何となれば今主と共に天國に於て喜ぶ主の聖徒だち現世に在る間は信仰と忍耐を以て主の榮光の顯はるゝを待ち望みしなり聖徒の世に在りて信せし所は我も亦信じ其望みし所は我も亦之を望み又彼の至る所は我も亦主の恩よよりて至ることを信す其至る時まで聖徒の摸範によりて心を強められ信仰に於て正しく歩むべし又我慰と行の鏡の爲聖なる書冊を携へ又其最も超絶比倫なきものとして我藥となり我庇陰と爲るべき主の聖体を保持せり

ヨ来六〇十九、  
九〇三、

ル詩百十九〇五、

(二) 夫れ今世よ於て二の最も大切なるものあり若し此二のものあらざれば厭ふべき此世お生活すること能はず我此体の牢獄の中よ繋がるゝ間は此二物を要すること信認せり即ち一は糧よして一は光なり故よ主は我劣弱ヨリキを知り聖体を以て我に送り我体と魂の糧となし又聖言を以て我歩行の燈とあし給へり若し夫れ此二の物を欠げは我如何にして此世に生活せんや即ち主の聖言は我靈魂の光りなり主の聖餐は我生を養ふ糧なり又此二の物の猶聖公會の寶藏中彼此に置かれたる二の凡案の如し一は聖臺にして聖あるパンを備ふ是れ則ち基督の尊体なり一は神の律法の臺にして聖訓を載せて眞の信仰を教へ帷幕の奥の至聖ある

所まで導くものなり

(三) 永遠なき光より出る光なる主耶蘇よ主の臣下なる豫言者使徒及び其他教師よよりて傳へ給ひし此聖訓の臺の爲に感謝す又人間の造り主購ひ主ある主よ主は其愛を世界に顯ひし給はんが爲此大なる晚餐を設け給ひしを謝す是れ則ち摸形の小羊の如きにあらず實に主の聖なる体と血とを以て我等の食物として授け此聖なる饗應を以て善く信するものゝ心を歡ばしめ又拯ひの筒サカシキを以て十分喜ばしめ給へり其中には咸くパラダイスの樂ありて天使も我等と共に列りて尙優れたる歡樂を得るなり

(四) 夫れ會長の賤は最も大にして最も尊むべき哉彼の賤



は清き言を以て榮光の君の聖餐を聖成し唇を以て之を祝し手を以て之を取り己の口に受け又他人に授くることを委托られしあり  
 會長の手は宜しく潔白なるべく口は當さず清潔あるべく身は應に純善なるべく心は須く穢れなかるべし蓋し是れ清潔の源なる主の屢其内に入るよあらずやされば會長の口は數々基督の聖餐を受領するよよりて其中より正潔よして益ある言語の外何をも出すべからず常々基督の聖体を見るよよりて其眼は正しく淨かるべし其手は常々天地の造主に觸るよにより必らず淨く毎々天に向て攀ぐべし主は律法の中よ特に祭司に云ひ給へり汝等宜しく聖くあるべし蓋は主

マ利十九〇二

ある汝等の神は聖ければなり  
 全能の神よ恩恵を以て會長の職に任せられたる我等を助け其職に適ひ身を淨くし心を専らとし熱愛を以て主よ奉仕することを得させ給へ又此世に在りて我等の爲すべき如く全く潔白にして罪なきこと能はずと雖ども其犯せし罪を歎くことを得させ誠の謙遜を以て良志を立て是より後力を盡して熱心に主に仕かへさせ給へ

第十二章 聖餐に與からんとする者は基督を領くる爲大よ力を盡して其準備をなすべき事

(一) 主曰く我は則ち清潔を愛し純善を與ふるものなり我

イ賽六十六〇二

第十二章 聖餐に與からんとする者は基督を領くる爲大に力を盡して其準備をなすべき事 五十五

口可十四〇十四、

ハ哥前五〇七、

ニ詩百二〇七、

ホ百七〇十一、

清き心を覓めて我休憩の場所とあさん汝我が爲よ完  
 美にして宏壯なる客室を備へよされば我弟子と共に  
 來りて汝が家に逾越を守るべし若し我をして汝の心  
 に至り汝と共に居らしめんと欲せば古き麴種を除  
 き汝の心の居所を洗ひ清むべし汝必らず世俗の念慮  
 及び情慾紛雜を掃除し尙友なき雀の屋上に止まる如  
 く靜肅よし心を痛苦して捻て汝の過ちを思ふべし夫  
 れ人其愛する朋友の爲には華麗の客室を設けて以て  
 之を招くべし是れ其愛心の深きを見はすあり  
 汝須らく知るべし汝聖餐を領くる爲多くの要務を抛  
 ち心を餘事よ止めず全一年の間其準備を爲すも汝の  
 功猶足らざることを汝我几案よ來ることを許さるる

ハ惟我恵と愛によりてなり恰も貧者にして富者の饗  
 應よ招かれ其恵よ酬ゆること能はず惟自ら謙遜りて  
 之を拜謝するの外なきが如し  
 汝習慣に従ひ或は已を得ずして爲さず力を盡して努  
 め勵むべし汝の愛主ハ憐みを以て來臨るが故よ眞の  
 愛情を以て之を迎へ恐懼と恭敬を以て其聖体を領く  
 べし我は汝を招きしものなり我之を命せしなり我汝  
 の欠ぐる所を補はん汝來りて我を領けよ  
 (二) 我熱き信仰の恩を汝よ與ふるときハ必らず神に感謝  
 すべし是れ汝の功績によるにあらず汝を憐むよより  
 てなり  
 若し汝が心慰の潤ひなくして乾くときは斷ず祈禱を

第十二章 聖餐に取からんとする者は基督を領くる爲大に力を盡して其準備をなすべき事 五十七

捧げて悲歎し一滴たりとも救ひの恩露を受領するま  
 で門を叩きて轍むこと勿れ汝は總て我恩を要すれど  
 も我は汝に要するものなし又汝が來るは我を聖と爲  
 さんとするよあらず我汝に來り反て汝に聖を授け善  
 人と爲さんとするにあり夫れ汝の來るは我よ因て聖  
 となるを得我に合体して新なる恩を得又奮て心の過  
 を改むることを得んが爲あり故よ汝我恩惠を忽諸よ  
 すべからず宜しく力を盡し汝の心を備へて其愛する  
 主を迎ふべし

(三) 然れども聖餐の前準備をなして熱心を起すのみなら  
 ず聖餐を領けたる後も意を用ひて其熱心を保つは亦  
 緊要なり而して聖餐後に已を慎むは聖餐前の熱心の

準備と同じく猶緊要なり蓋は聖餐を領けたる后注意  
 して已を慎むは尙大なる恩惠を領くるの最もよき備  
 なればなりされど若し其心を放ち外部の慰藉を求む  
 るよ至らば再び其恩を享くるよ復歸り難からん  
 汝務めて多言を慎み必らず閑所に退き須らく汝の神  
 を喜ぶべし神は則ち汝と共に在りて全世界の力を以  
 てするも之を奪ひ去ること能はざるなり汝今より後  
 已によらずして却て我により總ての事思ひ煩ふこと  
 なくして生んが爲に全く己を我に捧ぐべし

第十三章 篤信家の全心を以て聖餐に於て  
 基督に結ぶを願ふべき事

(一) 主よ我如何にして獨り主に見ゆ我全き心を顯はし我

イ出三三三十一

靈魂の願望を充たしめて主を喜ぶことを得んや主よ  
 我如何にして人我を輕蔑せず又外物も我心を動かさ  
 ずして惟主のみ我と共にあり我主と相對して互に相  
 愛するものゝ如く談話し又親しき朋友の如く同く饗  
 應を爲し得べきや  
 我祈り且願ふ所は全く主と結び總ての受造物より我  
 心を放ち屢聖餐を受授するよりて天に在る永遠の  
 福を味ふを學ぶことは是あり噫主ある神よ我何れの時  
 主と結び主と合し我あるを忘るゝことを得べきや願  
 くば主我と居り我主と居りて常に相俱に居りて一と  
 なることを得させ給へ主の誠に我愛する者にして万  
 人の中より撰拔みしものなり故に我靈魂の生命あら

口約六〇五十六、  
十七〇三十三、  
ハ歌五〇十、

ニ賽四十五〇十五、

ん限り主と共に居らんことを願ふ主は誠に我を安す  
 るものにして我最も大なる平康と眞の和順は主に在  
 り主を離るれば則ち憂患勞苦と限りなき艱難あるの  
 み主は誠に秘藏して顯はれざる神にして悖戻るものに  
 は聖意を示し給はず只謙遜にして純善なるものと語  
 り給へり  
 (二) 主よ主の靈は至香ばしき哉主は特に其香ばしきを子  
 等と顯はし天より降る至甘き糧を以て之を補養し給  
 ふ  
 主は我神にして捻て信仰ある者よ近く在し日々慰  
 と其心を天よ向はしめんが爲已を與へて我等の糧と  
 喜びよなし給ふ嗚呼是れ何れの國人か此の如く大に

ホ申四〇、七、

第十三章 篤信家は全心を以て聖餐に於て基督に結ぶを願ふべき事 六十一

詩百十六〇十一

して其神之に近く在すぞ又何れの國人か基督の民の如く大なる威光あるう神は臨みて已の榮光ある肉を以て頼ひ給ふ信仰ある靈魂の如く天下の受造物中何物か能く斯の如く愛せらるる乎

嗚呼言語を以て盡し難き哉主の恩惠感佩すべき哉主の憐恤推測り難き哉殊に人類に授け給ひし仁愛我何ものを以て其恩惠と此著しき愛の爲に主に酬んや夫れ我の一も主に報ゆるものなし惟全心を捧げて主と合するの外主の聖意に適ふものあからん若し我靈魂全く主に合することを得ば我全身喜び暢ふるを得ん于時主に我に謂ひ給はん汝我と共に居るを願はし我も亦汝と共に居らんとす我之に答へて云

詩三十一〇十九

はん主よ憐みを以て我と共に在まし給へ我喜んで主と共に居り我心は全く主に合することを願ふ是れ他ならず我專望ありと

第十四章 基督の體を領けんとする篤信家の熱望

(一) 主よ主を畏敬するものゝ爲に蓄へ給ふ主の愛大なる哉

我最も大なる畏敬と愛情とを以て聖餐を領くる人を念ふ毎に我自ら赦面し且慚う蓋は我心聖餐の几邊に近づく時は冷淡にして潤ひなく乾くことありて屢心の愛情を保つことなし我神よ我の全く主の前にて燃ゆる熱心なく主を慕ひ主を愛すること少くして彼の

多くの熱心家の如くならざるを愧づ彼等は殊に主と交はることを希望し心の愛に充たされ涙の流るゝを止むることなくして只心と体の口を開らさ生命の泉なる神を深く慕ひ大なる喜びと靈魂の飢渴を以て主の體を領けざれば其飢を醫し或ハ飽かしむることを爲し能はざるものなり

眞なる哉切なる哉彼の厚き信仰は疑ひなく主の聖臺よ在し給ふを證すべし是れ彼等ハ昔時の聖徒ミツメの如く主耶蘇途にて彼等と語る時其心燃ヒて遂は糧を裂き給ふによりて其主を知るよ至ればなり

(二) 至ト柔和にして最も仁惠ある耶蘇よ願ハくば此貧しき者

口路廿四〇三十一、  
三十五

を憐み給ひ聖餐に於て或時は幾干か主の渥き愛に感せしめ以て我信仰を強め彌主の慈惠を希望するに進ましめ又天のマナを享くるによりて一度燃されたる愛をして恒は消ハえさらしめ給へ

主よ主の仁惠誠は大なる哉主は我望む所の恩惠を與へ又主の定めトの期節キ來らば聖ある火の愛を以て我心に熱を加へ給はん假令彼の熱心なる人の如く我心の愛情燃立タざるも主の仁惠よりて甚だ大なる熱望を懐くことを願ふ又主を愛する人々の熱心の幾分を分ちて我に與へ其聖ある人と伍を爲さしめ給ふこと我希望なり我祈る所なり

第十五章 熱愛の恩は謙遜と己を捨るによ

第十五章 熱愛の恩は謙遜と己を捨るによりて得らるゝ事 六十五

りて得らるゝ事

(一) 主曰く汝只管よ熱愛の恩を慕ひ懇切よ求め且忍耐と  
 確なる信仰とを以て之を待ち望むべし汝若し此恩を  
 享くれば必らず感謝して謙り守りて失ふことなく之  
 よ従ひて精勉し天より此恩を與へらるゝまで其多寡  
 と時期は神よ任すべし  
 汝若し心に熱切の愛を見ざれば則ち愈自ら謙遜り苟  
 も志を失ひて愛を過すべからず神は久しく求むる所  
 あれども曾て與へ給はずして或一分時に於て残らず  
 之を與へ給ふことあり又神は祈禱の初に與へずして  
 其終りに與へ給ふことあり若し恩恵は求むるに従ひ  
 直よ與へらるゝものならば弱き人間の力實に堪へ難

イ路十一〇八、

からん故に汝望は最も熱くし謙遜と忍耐を以て熱愛  
 の賜物を待ち望むべし  
 然れども主は之を與へ給はず或の竊に之を取り給ふ  
 ときは是れ即ち己の罪過よよるものと思ふべし時と  
 して僅々の過により其恵を阻げ或は之を隠さるゝこ  
 とあるべし此れ小事の如くなれども大なる益を妨害  
 するものなれば豈之を大事と云はざるべけんや故よ  
 過失の大小に論なく全く洗ひ去り勉めて其過失に勝  
 たば必らず願ふ所の恵を賜はるべし汝全く己を神よ  
 捧げ己の志と願望によりて彼と是とを好まず悉皆神  
 に委托せば其心神と合して直よ安心を得べし如何と  
 なれば神の聖意よ適ふの外汝を樂ませ汝を喜ばすこ

とあらざればあり  
 人誠に純粹の心を以て己の志を神に捧げ又非常に受  
 造物を愛し或は嫌ふことを止むものゝ恵を受くるよ  
 適ふものとなりて亦熱愛の賜物をも與へらるべきな  
 り蓋し神の虚しき器を見認て以て之に恵を充滿しめ  
 給へばなり夫れ人一切世の事物を棄てて己を與み既  
 り死したる者の如くせば主の恩速に來り豊に入りて  
 其心充分自由に高く騰ぐることを得べし  
 (二) 其時彼は見て喜びに充たされ其心驚き怪み且廣ら  
 なるべし是れ主の手彼と共にあり彼も亦全く永遠の  
 爲己を神の手に任せたればなり見よ全心を以て神を  
 求め空しき事に己の靈魂を倚せざるものは斯の如く

口賽六〇五、

ハ詩百十九〇二、

ニ詩廿四〇四、  
ホ百廿八〇四、

幸福を得べし斯る人は己の熱愛を増すと慰を受くる  
 を願みす只神に榮光と榮譽ホテレを歸せんとするが故に聖  
 餐を領けて神と合する大なる恵を受くるに足るもの  
 となるべし

第十六章 己の望み需むる所を基督に開陳

し以て其恩を祈るべき事

(一) 最も柔和にして愛深き耶蘇よ我今誠の恭敬を以て主  
 を領けんと欲す主は明らかよ知り給ふ我甚だ弱くし  
 て惱を受け多くの罪過に溺れ亟誘はれて苦み又汚穢  
 さるゝことを我今己の病痕を療せんとして主の前よ  
 來り且慰を乞ふて主の救介を得んことを祈る総ての  
 事を知悉し給ふ主の前よ陳べん我心は即ち主の前に

第十六章 己の望み需むる所を基督に開陳し以て其恩を祈るべき事



明なり蓋は主のみ我を慰め我を助くることを得べければあり又主の我善事に欠けたるを知り又道徳に於て最も乏しきことを知り給ふ見よ我貧しくして裸体を以て主の前に立ち恩を乞ひ憐みを願ふなり

(二) 主よ我の乞食の餓たる者なり願くば補養を加へ給へ我心は冷なり願くば愛の火焰を以て熱を加へ給へ我心は瞽なり願くば我と共に在して主の光を以て之を照らし給へ主よ願くば我をして世味の甘きは却て苦しど爲さしめ給へ総ての苦み及び望みに逆ふ者は我をして却て能く忍ぶことを得させ給へ地の総ての事物の我をして却て賤しきものと爲して之を棄てしめ給へ願くば主よ我心をして地よ蕩散サマユハしめず扶け起し

て天よ向はしめ給へ主は我飲食の料なり我愛と慰あり我最も甘き者我が完全の善なれば今より永遠に至るまで主のみ我を樂ませ給へ

主よ願くば我と共に在まし給ふにより我を熱くし我を燒蕩し又我を化して主に合せ熱愛に鎔化して秘密の合体の恵を得て遂に主と結び一の靈とならせ給はんことを又願くば我を飢させ我を渴かせて歸らしむることなく却て至妙なる恵を以て聖徒を待遇アツラひ給ひし如く仁慈を以て我を待遇ひ給へ我全く主の爲に燃され已に對して死したる者の如くなるも是れ異むべきよあらず主は恆に熄むことなきの炎にして内心を潔め且精神を照らすの愛あればあり

第十七章 宜しく熱愛と切願を以て基督を

領くべき事

(一) 主よ曾て言行を清潔にし人に先て最も主を喜ばしめ且秀たる恭敬を以て世を渡りたる許多の聖徒と熱心家の聖餐を領くるよ主を慕ひし如く我も亦恭敬と熱愛を極めて以て主を迎んことを願ふ我神よ主は永遠の愛我完き善量りなき幸福なり聖徒の中に於て最も勝れて顯ゆれたる跡を慕ひ猶彼より深き熱心の望と適當なる恭敬とを以て主を迎へ主を領けんことを願ふ夫れ我は微少の功績なくして此熱愛の感を起すよ堪へざるも我獨り捻て斯の如く充分に熱心の希望を懐くものゝ如く我心の愛情を完く主に捧げ奉る又信

仰ある靈魂の想像し且希望し得る所は我之を深き恭敬と厚き愛情とを以て主よ捧ぐべし我已の爲よ只一の物をも留めず我と其所有物は喜んで全く主に捧ぐべし

我造主我贖主我神ある主よ今主を迎へ主を領くるに當り熱心と恭敬、讚美、感謝、潔淨、信仰、希望及び愛情とを以てせんとす我恰も主の聖なる母即ち尊むべき處女マリアの主を迎へ主を慕ひし如くすべしマリアは曾て天使の主の人となり給ふ奧義を報する時に謙遜と熱愛を以て答へて曰く見よ是れ我は主の使ひ女なり主の云へる如く我に應かじ又恰も主の前驅にして諸聖徒の中最も勝れたる洗禮のヨハネの如くすべし彼

イ路一〇三十八、

路一〇四十四、

約三〇廿九、

れ母の胎内より在りし時主の其前に在すを悟り即ち聖靈の喜びの爲其胎中より在て跳れり其後衆人の中にて主に見ゆし時又自ら熱愛を以て恭敬ひ謙遜りて曰く「新耶の友たちて其聲を聞かば之に因りて喜び多し」と我も亦斯の如く聖なる望と熱心を發し我全き心を以て主より捧ぐることを願ふ我亦諸の熱心なる靈の喜悦切愛、非凡の傾向心、天上の默示、天の幽幻と天地の間より在て造られたるものより嘗て捧げし所又後に捧げんとする所の譽と讚美を以て主に供せんとす願くは我と總て我が仲保を願ふものをして宜しきより適ひて主を稱譽め又永遠カキリナく主を崇めさせ給へ

(二) 主ある我神よ主の威稜は大にして言語を以て云ひ盡

但七〇十四、  
歌七〇九、

し難きあり我主より適ひて永遠の讚美究りなき祝謝を捧げんことを願ふ神なる主より願くは此祈と此希望を受け容れ給へされば我盡く讚美を主に歸し時々刻々讚美を主に歸せんことを願ひ又天より在るの靈及び世界に在て主より仕ふる人々より我と共に總て讚美と感謝を主より歸せしめんが爲祈りと希望を以て勧め且願ふ願くは諸國諸民諸音をして一齊に主を讚め又至高なる喜悦と熱愛を以て主の最も聖く且美き名を崇めしめんことを又願くは恭敬と熱愛を以て主の至高なる聖典を祝し又厚き信仰を以て之を頌くるものをして主の前に恵と憐みを蒙ることを得又罪人なる我爲に仲保せしめんことを又聖餐によりて其願ひし熱愛

及び主と合体するの恵を得て聖なる慰め其心に充ち  
 靈なる糧を以て養れ此聖なる響應を去る時に彼等を  
 して貧しき我を記憶せしめんことを願ふ  
 第十八章 人は妄りよ聖典の事を識すべからず唯謙遜を以て基督に従ふも  
 らず唯謙遜を以て基督に従ふも  
 の如く己の感覺を信仰に服せしむべき事  
 (一) 主曰く汝若し疑惑の深き淵に陥るを免がれんと欲せ  
 ば無益なる好奇の心を以て漫りに此聖典の奥義を研  
 究すること勿れ蓋は主の榮光を察んとする者は必ら  
 ず主の光に依り眼眩むべしと是れ神の能力を以て爲  
 し給ふ所は遠く人間の智慧の及ばざる所なればなり

イ箴廿五〇廿七、  
 (羅)

然れども謙遜と恭敬を以て眞理を討尋るは咎むべか  
 らず但之を爲すは常に教へらるるを喜び諸先聖の善  
 き訓誨に従ひて歩行ことを勤むべし夫れ質朴の心を  
 以て議論と疑問との險途を離れ去り惟神の誠の平穩  
 なる軌道を行く者の誠に幸福なり  
 人多くは其智に過ぐる奥義を穿鑿せんとするにより  
 て其熱心を失へり神の汝に要め給ふもの唯信仰と  
 質朴の行ひにして高尚なる智慧若くは神の奥義に熟  
 達することにあらざるあり汝の下界に在るものすら  
 明らかに通曉こと能はずして如何で汝の上界のもの  
 を悟解り得べきや汝必らず神に伏し汝の知覺を其信  
 仰に服せしめよ然らば主は汝の有益と必要を推測り

人は妄りに聖典の事を識すべからず唯謙遜を以て基督に従ふも  
 の如く己の感覺を信仰に服せしむべき事